

第6節 5区の調査

1・2区で検出した東南から北西に流下する自然流路（SR1003・SR2002）は善通寺病院敷地の南半部に展開する最も大きな微高地の北東を限る自然地形である。本調査区はその微高地の北東隅に近い縁辺付近に位置する。したがって調査区内においては基盤層の大きな起伏はないものの、調査区全体に厚さ約20cmの褐色系粘質土が黄色シルト層の上部を覆い、古代以後の遺物を包含する。この包含層堆積が古代から中世にかかる微地形を反映するものと考えられる。これらの包含層を切り込む遺構は主に灰色系シルト層を埋土とする遺構で、掘立柱建物跡や溝跡がある。中世および近世・現代に所属する遺構である。包含層を除去した段階で弥生時代から古墳時代にかけての遺構を確認した。これら包含層下面で検出した遺構は上部が削平を被り、遺構下半部のみが残る。堅穴建物15棟、掘立柱建物跡7、溝、柱穴等を確認した。多くの遺構が重複し、弥生時代から古墳時代にかけて集中的に集落遺構が構築されている。このことは当時の地表面土壤層が堅穴建物の廃絶残滓等により累積したことと推測されるが、中世以前おそらく古代後半ごろに一度削平され、その後古代以後の遺物包含層が堆積するような変遷をたどったものと考えられる。

以下、遺物包含層下面で検出した遺構を「a. 弥生時代から古墳時代前期」とし、上面で検出した遺構を「b. 古墳時代後期以後」として報告するが、b. に含まれる遺構はこの調査区においては中世以後に限られる。

a. 弥生時代から古墳時代前期

1) 堅穴建物

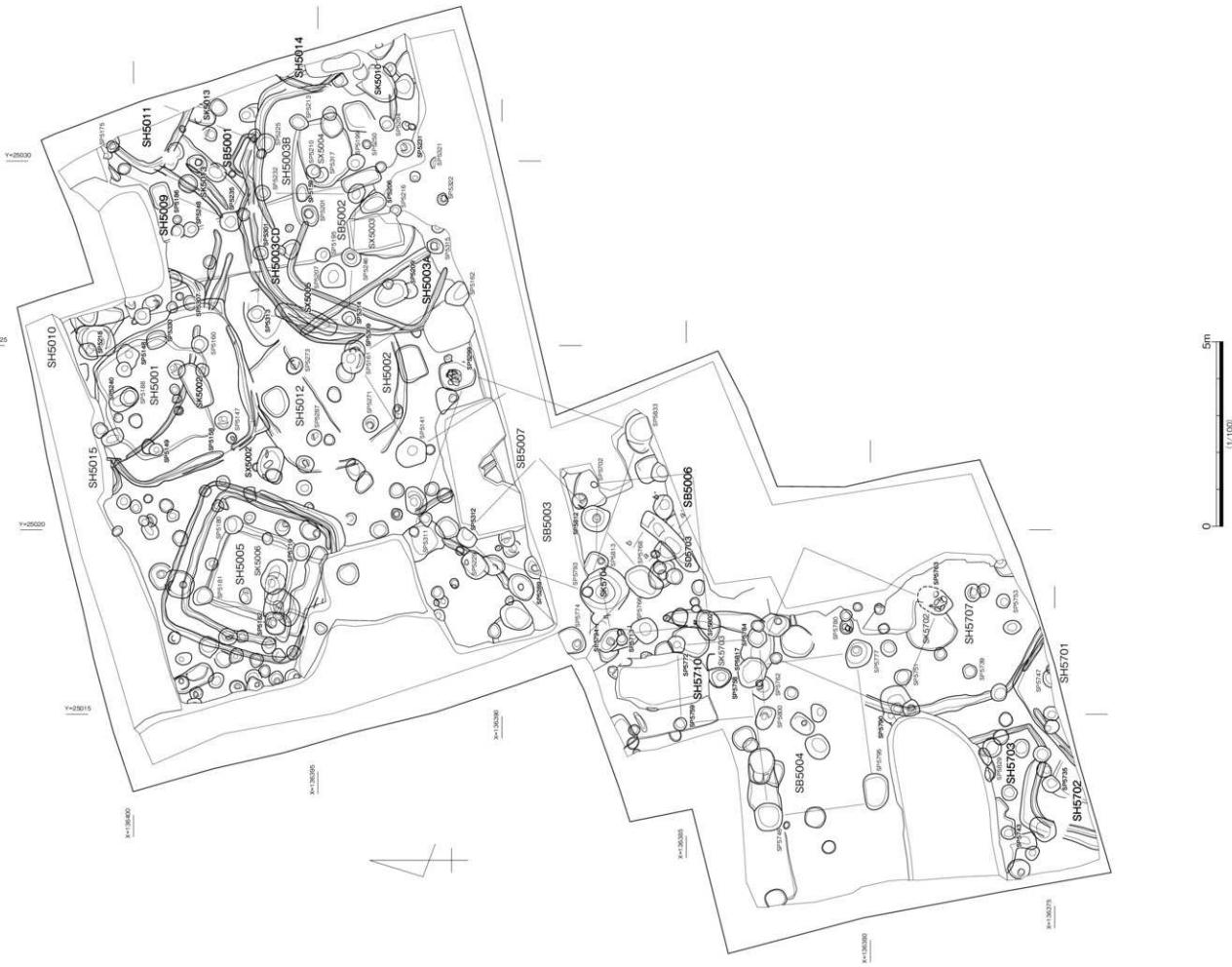
SH5001 (137 ~ 140 図)

調査区北東部で検出した隅丸方形の堅穴建物である。南北4.4m、東西4.4mで主軸は北から20°西偏する。主柱穴は4本で柱間は2.1~2.3m、4隅柱を繋ぐ線の外側に厚さ約20cmの盛土による貼床（aライン11・12層）を設ける。下段床面の南端に長さ1.3m、幅0.6m、深さ0.12mの長方形の炉跡（SK5002）が伴う。炉跡は底面が平坦で薄い炭層が残る。主柱穴には直径15~20cmの柱痕及びその抜取り痕が残る。上段床面（貼床上面）の深さは検出面から0.15m、下段床面の深さは0.27mである。

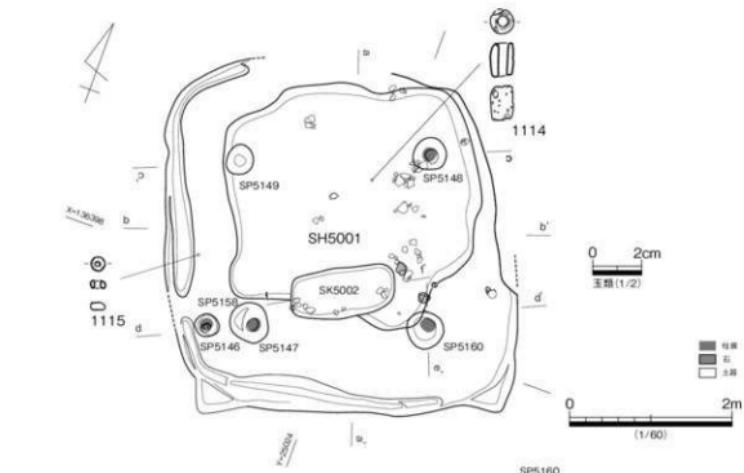
上段床面（貼床上面）、炉跡内、主柱穴SP5149の柱抜取り痕から残存状況が良好な土器が出土した。また、下段床面で玉（1114）が出土した。

東でSH5009・SH5010と、北でSH5015と、南でSH5012と重複しており、その中で最も新しい堅穴建物である。

出土遺物は弥生土器、石器、玉があり、上層から須恵器が1点出土しているが、埋没後の窪みに流入したものと考えられる。1061~1070は壺である。1061・1062・1064は頸部が直立し口縁部が屈曲して外反するものである。1063・1066は頸部が短く外反しながら口縁部に至る形態。1067~1070は稜線が不明瞭で底面が凸面となる壺底部である。1071~1079は甕である。口縁部が「く」字に屈曲するもの（1071・1073~1078）と、緩やかに反転して外反するもの（1072）がある。1071・1072はいずれも胴部内面上端付近までヘラケズリを施す。1079はタタキ成形の甕底部で平底をとどめる。1080~1089は丸底の鉢である。このうち1089は極端に浅い丸底の皿状鉢（1089）で弥生時代終末期新相に属す。1091はミニチュアの台付鉢とした。体部は上方に直立する。体部は手づくね作りで製塙土器

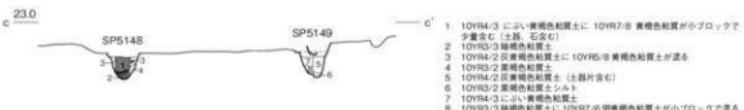


136図 5区第2遺構面全体図



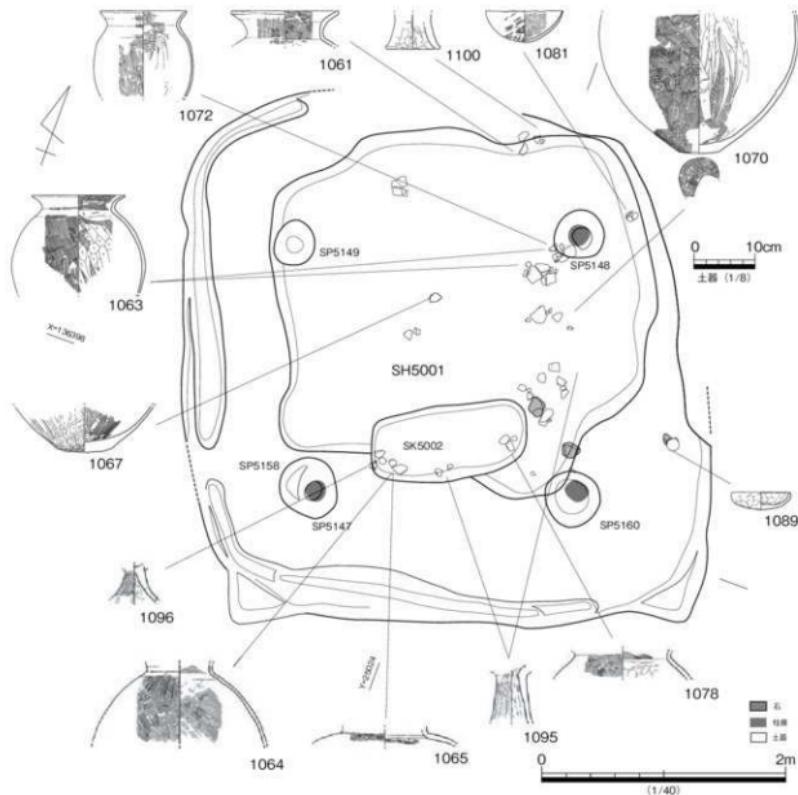
- 1 10YR6-/2 黄褐色粘土質土に 10YR4-/3 に似る黄褐色粘土質土が混る (土器片含む)
 2 10YR3-/2 黄褐色粘土質土に 10YR4-/3 に似る黄褐色粘土質土が混る (土器片含む)
 3 10YR4-/2 黄褐色粘土質土に 10YR4-/4 黄褐色粘土質土が混る
 4 10YR4-/2 黄褐色粘土質土に 10YR4-/6 黄褐色粘土質土が混る
 5 10YR4-/2 黄褐色粘土質土に 10YR4-/6 黄褐色粘土質土が混る
 6 10YR3-/2 黄褐色粘土質土に 10YR4-/6 黄褐色粘土質土が混る
 7 10YR5-/3 に似る黄褐色粘土質土に 10YR6-/B 明黄色粘土質土に少ブロックが多量に混る
 8 10YR5-/3 に似る黄褐色粘土質土に 10YR6-/B 明黄色粘土質土に少ブロックが多量に混る
 9 10YR5-/3 に似る黄褐色粘土質土に 10YR6-/B 明黄色粘土質土がまだらに混る (土器片少量混る)
 10 10YR4-/3 に似る黄褐色粘土質土に 10YR4-/4 黄褐色粘土質土が混る (5mm程度のしゃく含む)
 11 10YR4-/2 黄褐色粘土質土に 10YR6-/B 明黄色粘土質土が混る
 12 10YR4-/2 黄褐色粘土質土に 10YR6-/B 明黄色粘土質土が混る
 13 10YR4-/3 黄褐色粘土質土に 10YR4-/4 黄褐色粘土質土が混る
 14 10YR4-/3 黄褐色粘土質土に 10YR4-/6 黄褐色粘土質土が混る
 15 10YR4-/3 に似る黄褐色粘土質土に 10YR6-/B 明黄色粘土質土がまだらに混る (1cmの土器片含む)
 16 10YR4-/3 に似る黄褐色粘土質土に 10YR6-/B 明黄色粘土質土が混る
 17 10YR4-/2 黄褐色粘土質土 (土器片)
 18 10YR4-/3 黄褐色粘土質土 (土器片)
 19 10YR4-/3 黄褐色粘土質土に 10YR6-/6 黄褐色粘土質土が混る
 20 10YR4-/3 黄褐色粘土質土に 10YR6-/6 黄褐色粘土質土が混る
 21 10YR3-/2 黄褐色粘土質土に 10YR6-/B 明黄色粘土質土が混る
 22 2.5Y6-/3 に似る黄褐色粘土質土に 2.5Y6-/6 明黄色粘土質土が混る
 23 10YR1-/7/1 黄色 粘土

- 1 10YR4-/2 黄褐色粘土質土に 10YR6-/B 明黄色粘土質土がまだらに混る
 2 10YR4-/2 黄褐色粘土質土に 10YR6-/B 明黄色粘土質土がまだらに混る (土器片含む)
 3 10YR1.7/1 黄色 粘土



- SP5146 - SP5147.
 d 23.0
 SP5146 SP5147 (SP5160 北隣) SP5147
 SP5146
 1 10YR6-/2 黄褐色粘土質土に 10YR6-/6 黄褐色粘土質土が多量に混る
 2 10YR6-/2 黄褐色粘土質土に 10YR6-/6 黄褐色粘土質土が混る
- c' 1 10YR4-/4 に似る黄褐色粘土質土に 10YR6-/B 黄褐色粘土質土が少ブロックで少量混る (土器片含む)
 2 10YR3-/3 黄褐色粘土質土
 3 10YR4-/4 黄褐色粘土質土に 10YR6-/B 黄褐色粘土質土が混る
 4 10YR4-/3 黄褐色粘土質土
 5 10YR3-/2 黄褐色粘土質土 (土器片含む)
 6 10YR3-/2 黄褐色粘土質土 シルト
 7 10YR4-/3 に似る黄褐色粘土質土
 8 10YR4-/3 黄褐色粘土質土に 10YR7-/6 明黄色粘土質土が少ブロックで少量混る
- d' 1 10YR4-/3 に似る黄褐色粘土質土に 10YR6-/6 明黄色粘土質土が少ブロックで少量混る (土器片含む)
 2 10YR4-/2 黄褐色粘土質土 (土器片含む)
 3 10YR3-/1 黄褐色粘土質土
 4 10YR3-/3 黄褐色粘土質土に少ブロックで 10YR6-/6 黄褐色粘土質土が混る

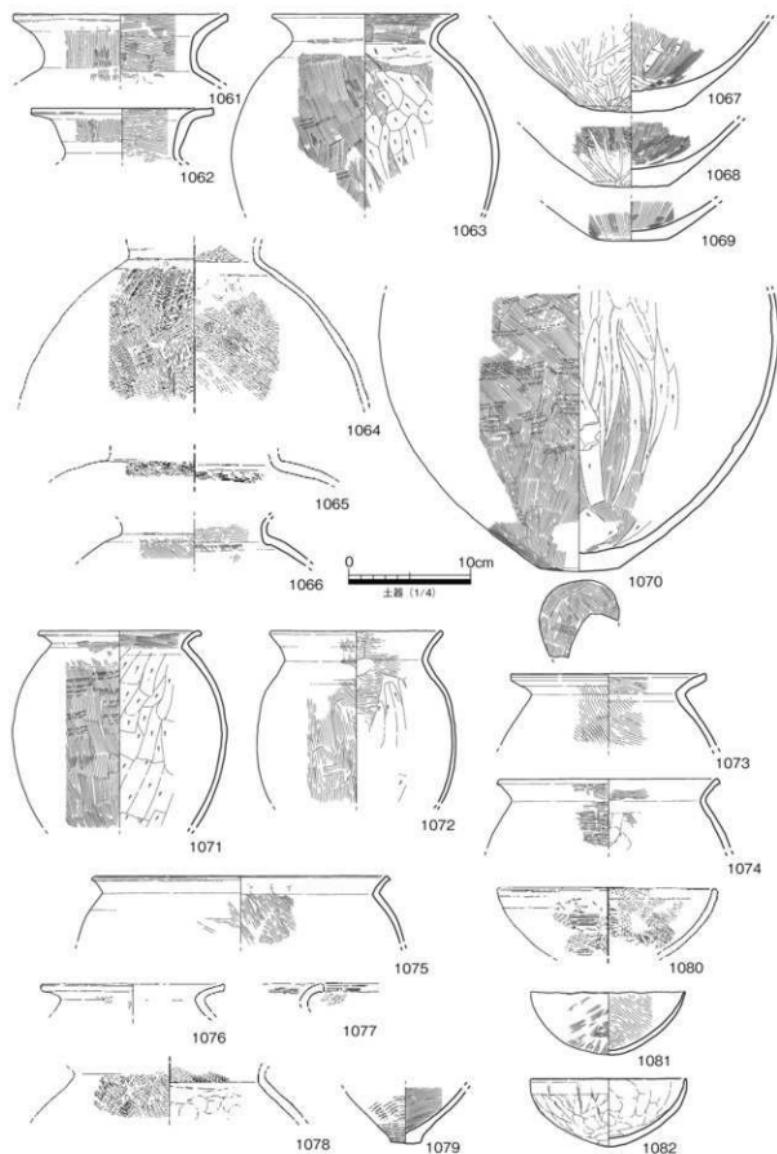
137図 5区 SH5001 平断面図



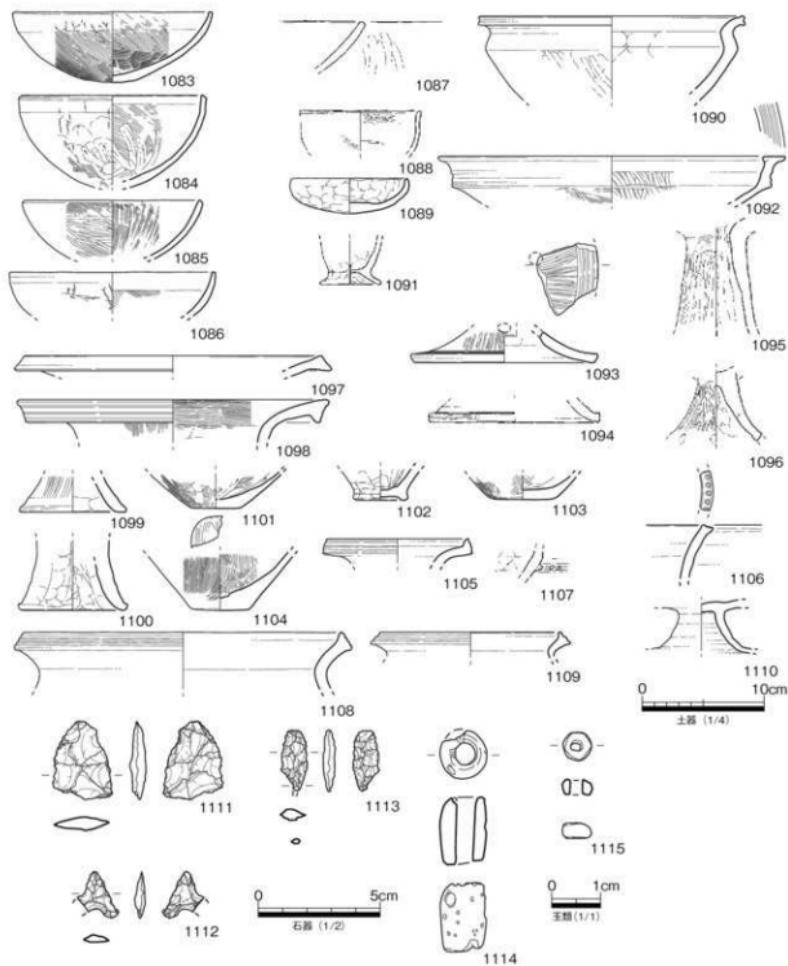
138図 5区SH5001遺物出土状況図

にも類似するが、脚部取り付け部の縮まりが弱いことから異なると判断した。1092～1096は高杯である。1095・1096が炉跡SK5002出土である。1097・1098は器台、1099・1100は支脚である。1100は下段床面出土である。1105～1109は弥生時代後期前半に所属する流入遺物である。1110は7世紀代の須恵器高杯脚部片で、埋土上層から出土した。1111～1113は流入遺物のサヌカイト製打製石器である。1111・1112は石錐、1113は石錐である。いずれも未製品で流入遺物。1114は長さ14mm、直径9.5mmのコバルトブルーを呈するガラス製の管玉である。器体は中膨らみの形状を呈し、小口は丸くおさめて面を形成しない。表面はやや風化し、器体内部には気泡が認められる。気泡に引き伸ばされた痕跡は認められない。穿孔は直径3.5mmとほかのガラス製小玉と比べかなり大きい。下段床面の中央付近の床面直上層（aライン7層）で出土している。1115は滑石製臼玉である。古墳時代中期以後に出現するものであり、調査時に何らかの理由で混入したものと考えられる。

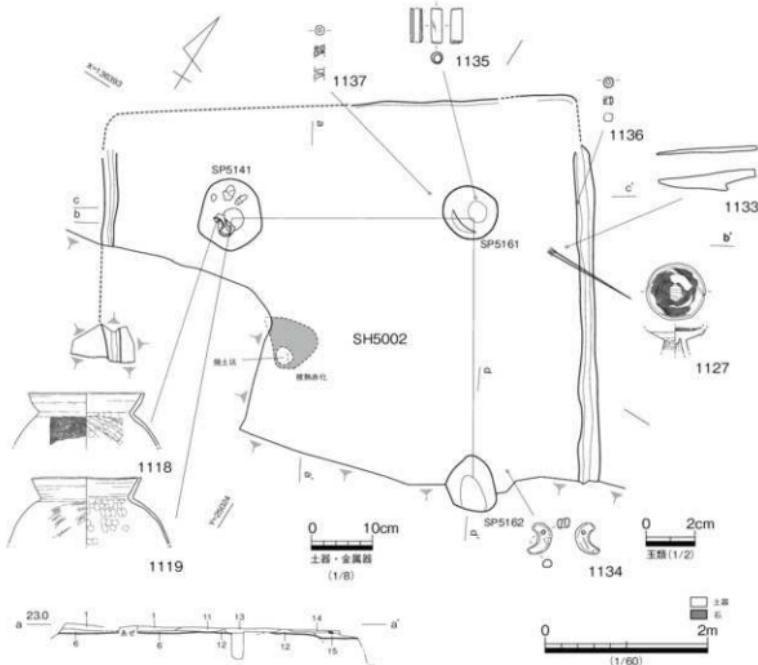
以上の出土遺物から、当該堅穴建物は弥生時代終末期に機能し廃絶したものと考える。



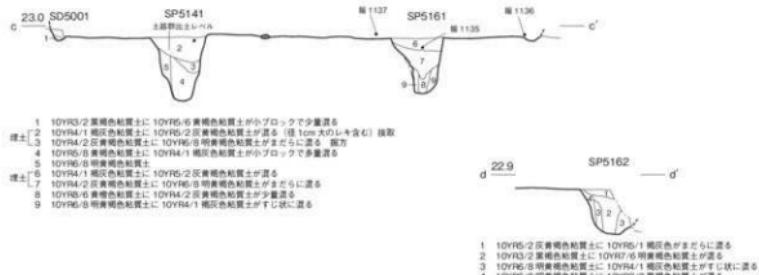
139図 5区 SH5001 出土遺物実測図 (1)



140図 5区 SH5001出土遺物実測図(2)



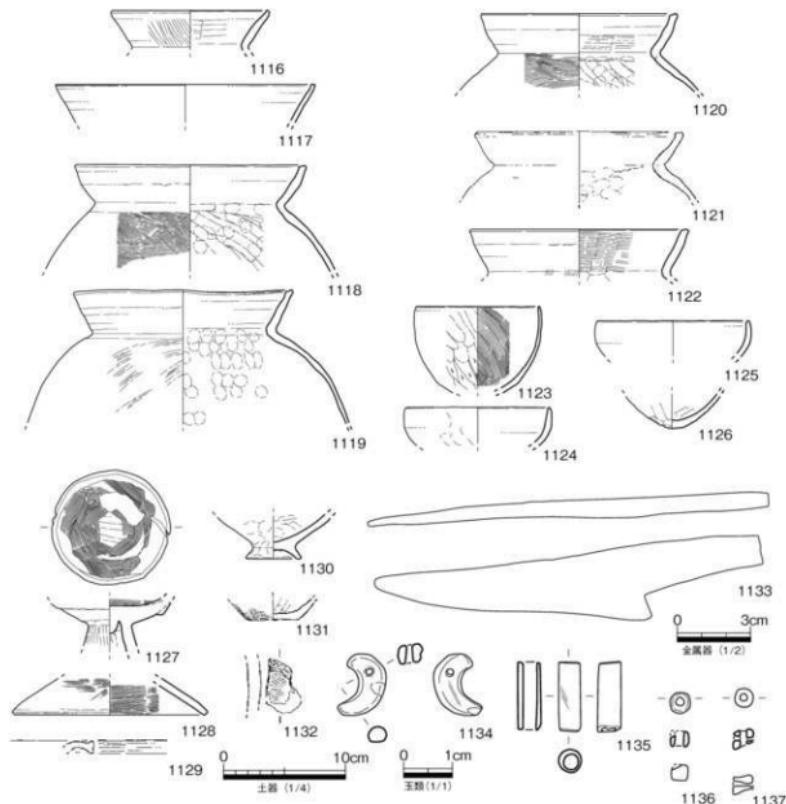
1. 10YR6/1 棕灰色粘質土に 10YR4/1 棕褐色地被質土が少しづつで少量に混む
 2. 10YR6/2 黄褐色粘質土に 10YR6/1 棕褐色地被質土が少しづつで少量混む
 3. 10YR6/2 黄褐色粘質土に 10YR6/1 棕褐色地被質土が少しづつで少量混む
 4. 10YR6/2 黄褐色粘質土に 10YR5/3(2) ないし 4 黄褐色粘質土を少しおかね
 5. 10YR6/2 黄褐色粘質土に 10YR5/3(2) ないし 4 黄褐色粘質土を少しおかね
 6. 10YR6/2 黄褐色粘質土
 7. 10YR4/3(1) ないし 4 黄褐色粘質土に 10YR4/6 棕色粘質土が少しづつで混む
 8. 10YR4/2 黄褐色粘質土に 10YR5/1 棕褐色粘質土が少しづつで混む
 9. 10YR6/2 黄褐色粘質土に 10YR4/4 棕褐色粘質土が少しづつで混む
10. 10YR6/2 黄褐色粘質土に 10YR4/5 棕褐色粘質土が少しづつで少量に混む
 11. 10YR6/2 黄褐色粘質土に 10YR5/6 黄褐色粘質土が粗粒に混る「土器片含む」
 12. 10YR6/3 明黄褐色粘質土 (表面被熱による変化)
 13. 10YR6/2 黄褐色粘質土
 14. 10YR6/2 黄褐色粘質土に 10YR7/6 明黄褐色粘質土が少しづつで混む
 15. 23Y5/2 棕褐色粘質土と 10YR4/6 棕褐色粘質土が少しづつで混む
 16. 10YR5/2 黑褐色粘質土に 10YR4/2 黄褐色粘質土が少しづつで混む
 17. 10YR5/2 黑褐色粘質土に 10YR5/5 黄褐色粘質土が少しづつで混む



141図 5区 SH5002 平断面図

SH5002 (141・142図)

調査区中央部で検出した堅穴建物である。中世の溝 SD5001 によって北壁の大部分を失うが、主柱穴 3 基及び南北方向の壁溝を床面で検出した。建物の東西規模は 6.1 m。北壁付近にわずかに残る段を当該建物の北壁とみて、主柱穴を反転させると南北規模は 6.25 m となり、床面積 38.2 m² の大型の堅穴建物が復元できる。柱間 3 ~ 3.4 m に配された主柱穴の平面形は最大直径 0.9 m と大きいが、掘方上半は柱の抜取り痕が占めており、当初の掘方は直径 0.5 m 程度と考えられる。掘方の深さは 0.7 ~ 0.8 m、抜取り痕下部に残る柱痕は直径 17 ~ 20 cm である。建物床面中央やや西寄りに直径 0.6 m の範囲で床面が被熱赤化しており地床炉と推定する。炉の中央やや南に直径 0.15 m、深さ 0.05 m の小ピットがある。支脚等の設置痕かもしれない。主柱穴 SP5141 の柱抜取り痕には 1118・1119・1121 の甕が折り重なるように投棄されていた。また床面東側を中心に玉類、鉄器片が出土した。



142図 5区 SH5002 出土遺物実測図

1116・1117は土師器壺口縁部片である。1118～1122は土師器壺である。口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部が肥厚し上端面を面取りする。胴部外面は斜め方向のハケ目調整、内面は顕著な指押さえを認める。布留式系壺である。1123～1126は底部が丸または尖形態の土師器鉢である。1127・1128は土師器高杯である。1127は杯口縁境に調整の粗い段を残す。杯部内面のハケ目調整は直線分割により施す。1129～1132は混在の弥生土器片である。

1133は長さ8.3cm、幅1.7cmの鉄製刀子である。1134～1137は玉類である。1134は滑石製勾玉である。1135は碧玉製管玉、1136・1137は滑石製白玉である。このうち1137は主柱穴SP5161の柱抜取り痕から出土した。

以上の出土遺物のうち柱抜取り痕で出土した1118・1119の壺が建物廃絶時期を示す。主に口縁部形態から布留式新相に相当し、古墳時代前期新相～中期古相にあたる。

SH5003

SH5003は4棟の堅穴建物が重複し遺構検出に困難を極めた。重複関係を把握するまでの仮の区画としてAから順にアルファベットを付けながら調査を進めたが、各建物の床面付近に到達するまで関係性が判明しなかったので、建物番号は更新せずA～Dの調査時の区画名を踏襲して遺構名とした。このうち、SH5003Aは埋土上部の主に西側で土器溜まりを形成しており、他の建物との区分は明瞭だが、埋土の東側には土器溜まりが及ばず、SH5003Bとの重複部分に攪乱があることなどから見極めが困難であった。SH5003C及び同Dは円形もしくは多角形の張りだし付建物と推定したが、両者を明確に区分することは困難であったため、CとDと一緒に報告することとした。以下、SH5003A、同B、同C・Dの順で記述する。

SH5003A（143～146図）

南北4.2mの方形堅穴建物である。建物西側で壁溝を検出したが、東側はSH5003Bと重複し壁溝ラインを検出することができなかった。主柱穴は4基で南北、東西とも柱間は2.6mである。主柱穴と西側壁溝との距離を東側に適用すると、東西の建物幅が4.8m、床面積は20.2m²となる。埋土は暗褐色系のブロック土（図の3層）で、aラインでは4層が貼床層の可能性が高い。主柱穴の大きさは直径0.4m、深さ0.55mで直径15cmの柱痕を確認している。

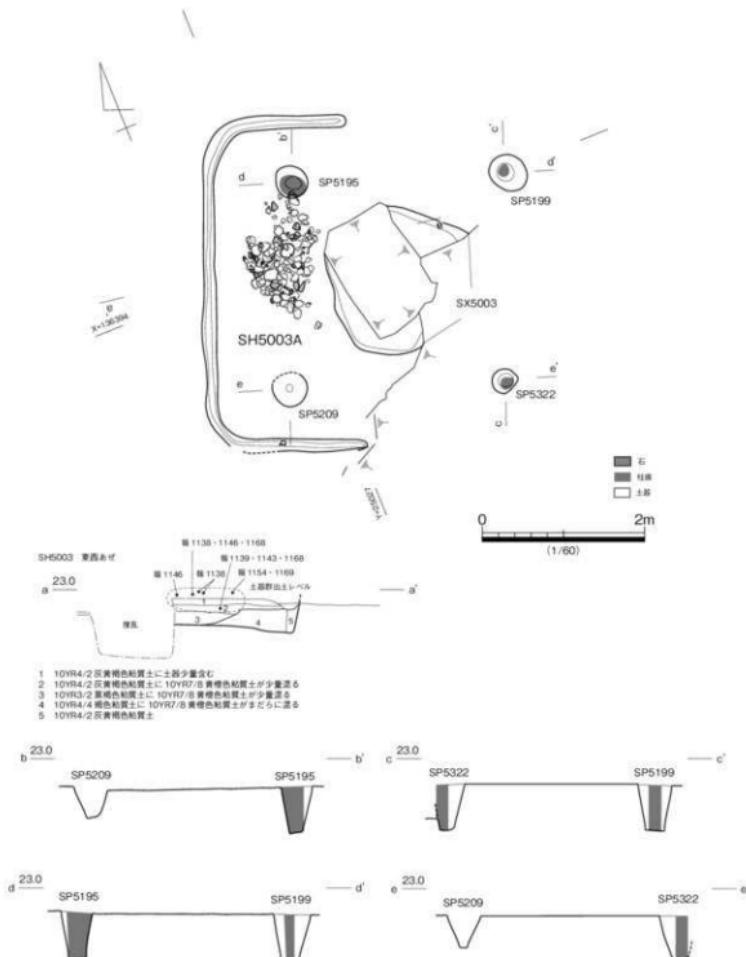
中央に攪乱があるが、その周囲の床面で褐色系埋土のSX5003を検出した。不整形だが底面は平坦である。位置的にみて当該建物に付属するものと考える。

西側の主柱穴2基の柱間部に多くの土器が投棄されていた。Aライン断面でみると1層またはそれより上位で出土しており、当該建物廃絶後しばらく放置されたのちに投棄・堆積したものと考えられる。

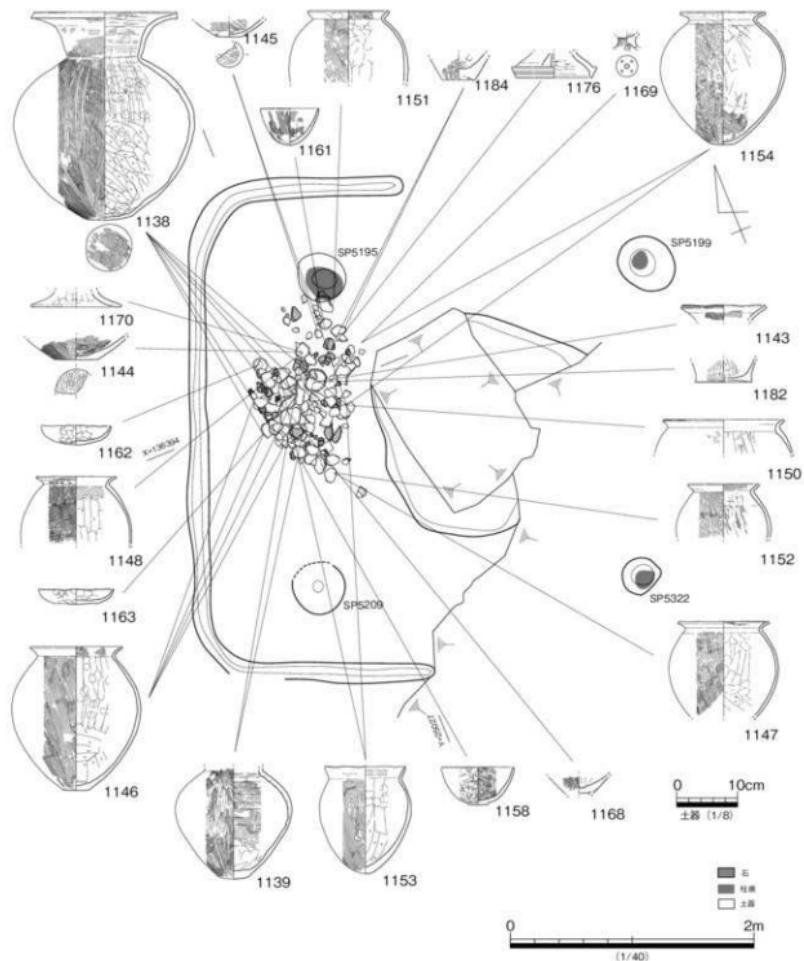
1138～1145は弥生土器壺である。1138は完形に復元した口縁部が外側に大きく開く形態の壺で球形の胴部および稜線があいまいな平底を備える。口縁端部は上下に拡張して面をもつ。胴部外面は斜め方向のハケ目調整を施したのち間隔をおいた縦方向のヘラミガキを暗文風に施している。内面は下半部にヘラケズリを行う。1139は肩が張る胴部から直立する頭部下端までの破片である。底部は厚めの平底だが、輪郭稜線があいまいである。1140は頭部径が大きく口縁部が外に短く屈曲して開く形態の口縁部片である。1141は口縁部が大きく外に開き、端部を主に下方に拡張する破片である。1144・1145はいずれも壺底部片で平底である。

1146～1157は弥生土器甕である。口縁部が「く」の字に屈曲し胴部中ほどに最大径をもつ形態が多く、底部は平底だが輪郭稜線が不明瞭である。口縁端部は軽く面取りするものが多い。1157は口縁部が屈曲して立ち上がり外面に擬四線を施す備後・東予・讃岐に共通する甕形態である。

1158～1168は弥生土器鉢である。1158～1161は口径が器高の2倍未満のもので底部形状は平底、尖底、丸底がある。1162～1164は器高が低く、口径が器高の2倍以上の皿状のものである。1167・1168は脚台が付く。



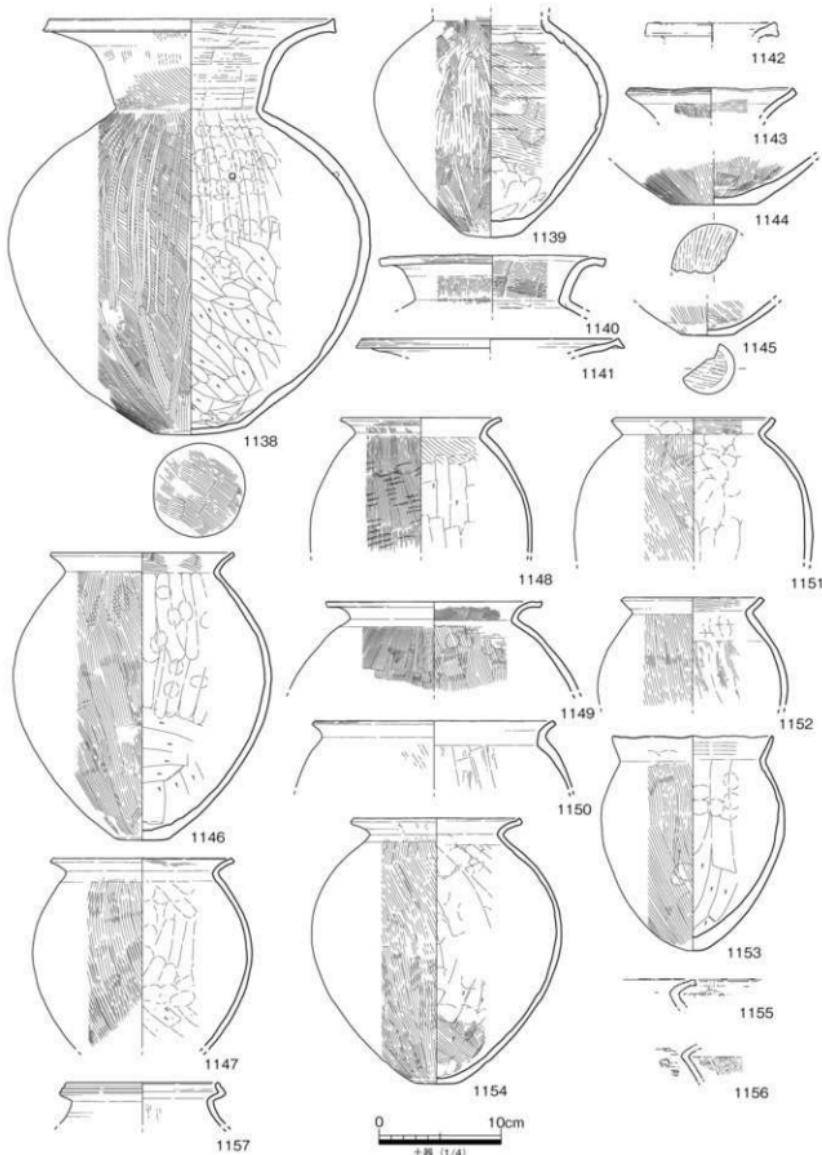
143図 5区 SH5003A 平断面図



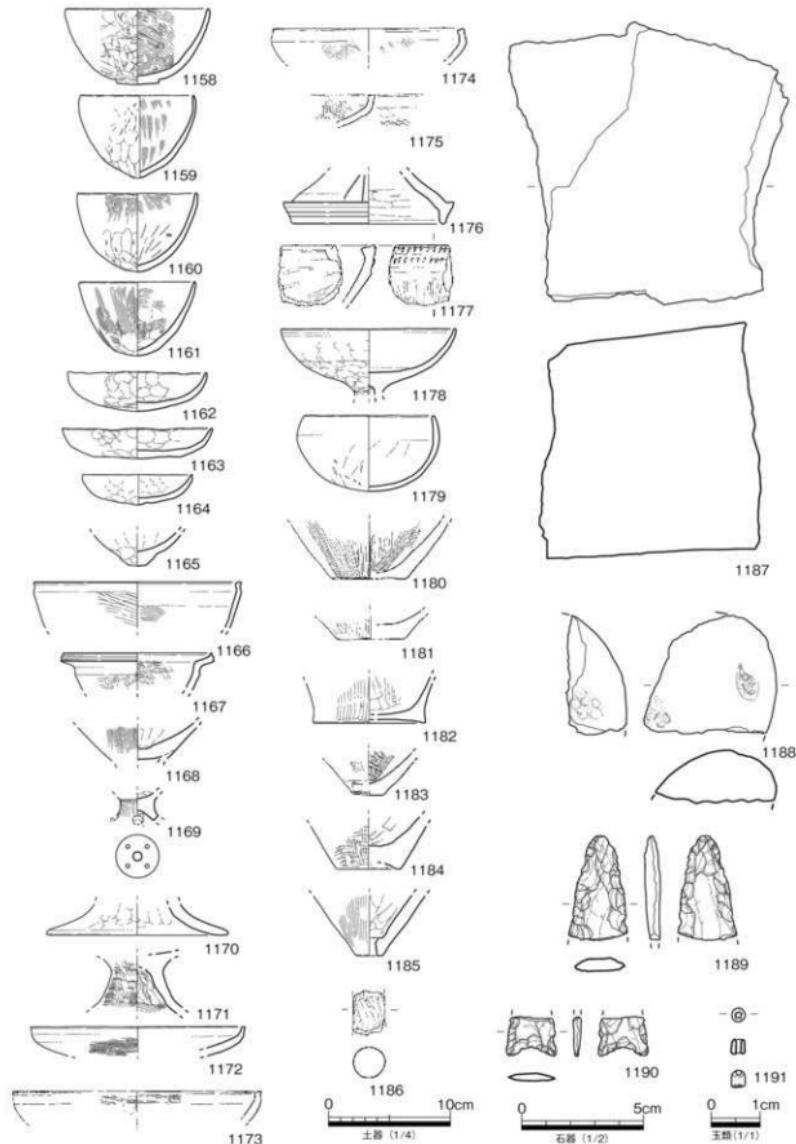
144図 5区 SH5003A 遺物出土状況図

1169～1175は弥生土器高杯である。1176～1182は混在と思われる弥生土器・土師器である。そのうち1178・1179は元来SH5002に包含されていたものが、調査時の遺構検出段階で混入したものと思われる。それ以外は当該建物より古い時期の遺物である。

1185は尖底鉢状の底部に焼成前穿孔を施す瓶である。1186は直径2.6cmの粘土棒表面を丁寧なヘラミガキで調整し、やや湾曲させたもので、大形の精製土器あるいは動物等の意匠をもつ土製品等と思われる。



145図 5区 SH5003A 出土遺物実測図 (1)



146図 5区 SH5003A 出土遺物実測図（2）

れる。

1187は砂岩製の大形の台石である。上面に平滑面を残す。1188は閃緑岩製の叩き石である。側面の一部にあばた状の敲打痕がある。1189はサスカイト製の打製石剣の未製品である。横長剣片を素材としており、素材面に磨滅等はみられない。1190はサスカイト製打製石鎌である。1191はガラス製小玉で鮮やかなブルーに発色する。

以上、SH5003Aは出土土器における球形化した壺胴部や皿状の鉢の存在から弥生時代終末期新相に位置づけられる。

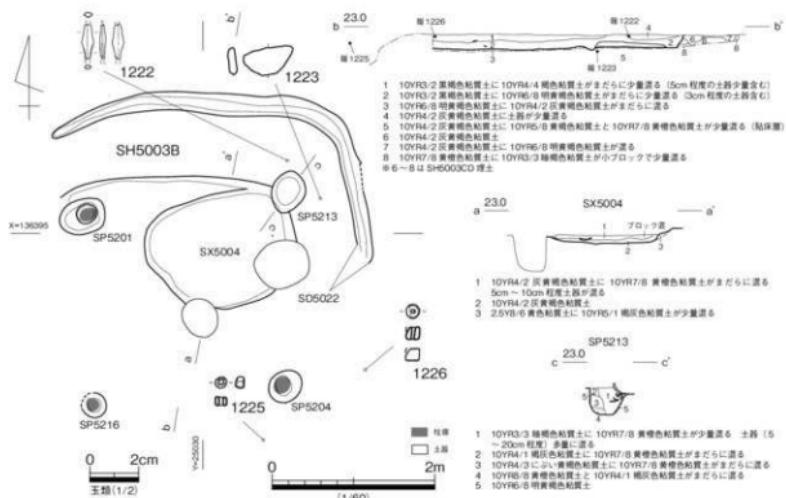
SH5003B (147・148図)

一辺約4.3mの隅丸方形の堅穴建物である。北・東側の壁溝と主柱穴4基で構成される。南・西側はSH5003Aなどとの重複により残っていない。主柱穴ラインから外側に薄い貼床層(bライン5層)を認める。中央土坑は確認できないが、北東側主柱穴に近接して1.5mほどの不整形な落ち(SX5004)が認められ、出土遺物に時期差がないことから、当該建物に伴うものと考える。

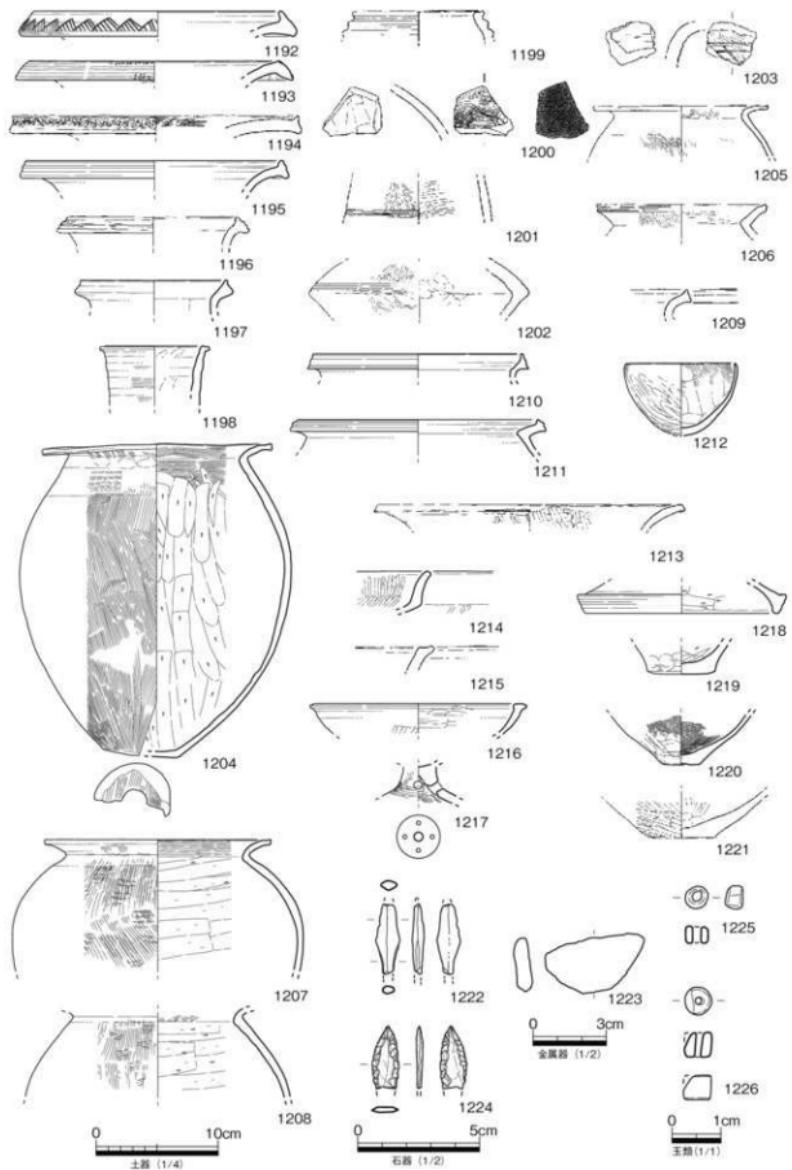
埋土上部や貼床面上で銅鏡1点、鉄器1点、玉2点が出土した。

1192～1203は弥生土器壺である。1192～1195は口縁部を上方または下方に抵張し鋸歯文、凹線文、波状文を施す広口壺である。1196～1203は古い時期の混在品で、おそらくSH5003C・Dに所属したものであろう。1204～1211は弥生土器壺である。1204～1208が当該建物に属する土器と思われ、口縁部が「く」の字に屈曲して強く反転し胴部中ほどやや上に最大径がくる形態である。1204の底部は安定した平底である。1209～1211は古い時期の混在品である。

1212は弥生土器鉢で、口径が器高の2倍未満で底部は丸底である。1213～1218は弥生土器高杯であ



147図 5区 SH5003B 平面図



148図 5区 SH5003B 出土遺物実測図

る。1213は口縁部が強く外反する高杯、1217は低脚の高杯で、この2点が当該建物に伴う。それ以外は混在品である。

1222は今回の発掘調査で出土した唯一の銅鏡である。残存長2.9cm、幅1.0cm厚さ0.5cmで先端部と茎下端部が折損する。先端から茎まで連続して中央に鏡がある。闇が最大幅となり、刃縁は直線的に窄まって先端に至る。茎部は側縁の研磨が緩いため内湾するカーブのまま下端に至る。典型的な連鑄式の銅鏡である。銅質はやや粗悪で渋灰緑青色を呈し、表面風化が顕著である。1223は刀子としているが、やや厚みのある鉄片である。

SH5003 C D (149・150図)

同じ位置で重複する2棟の円形堅穴建物である。内側の建物が新しく、外側の建物が先行する。内側の建物は最大径6.6m、外側の建物は最大径7.2mでいずれも北東部に張り出しをもつ。南東側の壁位置が把握できなかったので、正確な規模は不明だが、重複する壁は、一つの建物の建て替えを反映したものと考えられる。主柱穴は直径0.5~0.7mの掘方に直径15~20cmの柱痕をとどめる。北東側の主柱穴はSP5210とSP5159の両者が建て替えに伴って掘り直しされたものと考える。ただ、その先後関係は明らかでない。

中央やや東寄りで浅い長方形土坑(SK5008)とやや深い楕円形土坑(SP5233)が隣接する。前者は底面付近に炭層が薄く堆積し、後者は中央が窪むような黒褐色系シルトの堆積がみられる。両者の組み合せは当遺跡の後期の堅穴建物によく見られることから、同時期に機能した中央土坑と考えられる。張り出し部は7cmほど土を貼って床を作っているが、本体部の床面は大部分がほかの建物と重複しており、詳細な床構造は不明である。

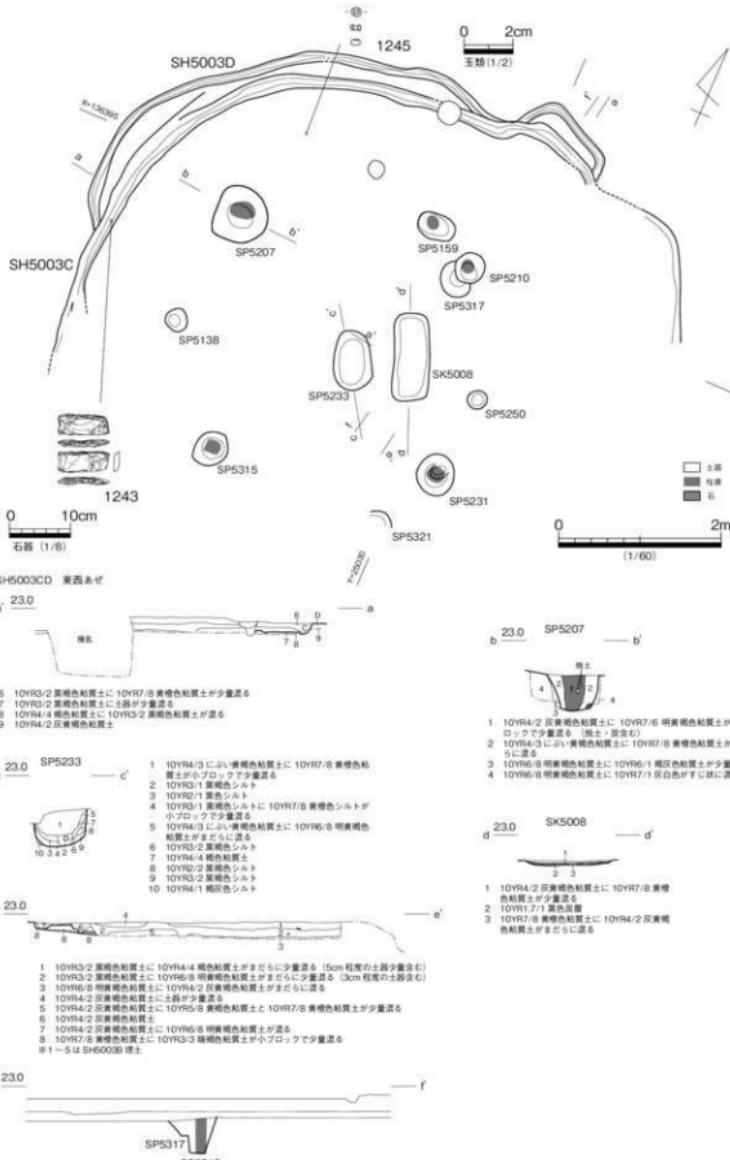
床面から玉が1点出土した。

1227~1229・1231は弥生土器壺である。1227~1229は弥生時代中期の混在品。1231は口縁部が緩やかに外反する無文の壺である。1230は口縁部下方を拡張する弥生土器壺。1232~1234は弥生土器鉢である。1232は直線的に開く体部に高台状に粘土を貼付する上げ底の鉢である。内外面を主に指押さえで仕上げており、ヘラミガキを施すような精製品ではない。1235・1236は高杯である。1235は裾が大きく開く高杯脚部片。1236は弥生時代中期の混在品である。1237は口縁部が大きく開く器台片。1238・1239は中央土坑SP5233で出土した支脚2点である。1238の口縁部は刻目装飾を施すが、体部は縦方向の粗いハケ目を残す。

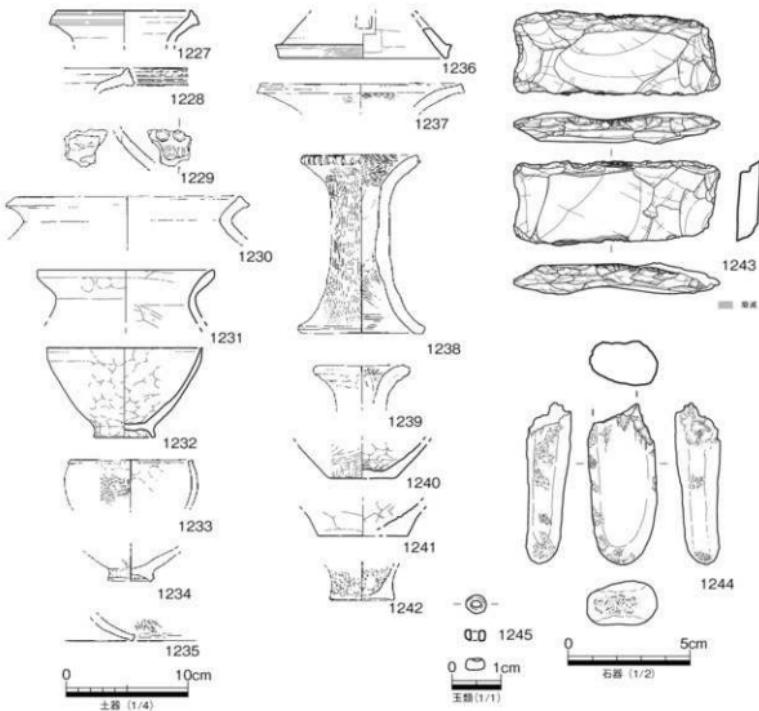
1243はサヌカイト製打製石包丁である。刃部付近に磨滅痕を残すが、それを切って上下縁に再加工を施す。1244は結晶片岩製の叩き石である。小口にあはた状の敲打痕を残す。1245はガラス製小玉で鮮やかなブルーに発色する。

なお、確実にSH5003D(建て替え前の建物埋土)で出土した遺物は1231・1232・1236・1240・1241である。

以上、SH5003C・Dは出土土器のうち1235の高杯脚部片や1238の支脚等からSH5003Cが弥生時代後期後半古相に、また1231の壺形態、1232の高台状の上げ底鉢、1236の方形透かし付高杯脚台等からみてSH5003Dは弥生時代後期前半新相と考えられる。



149 図 5 区 SH5003CD 平断面図



150図 5区 SH5003CD 出土遺物実測図

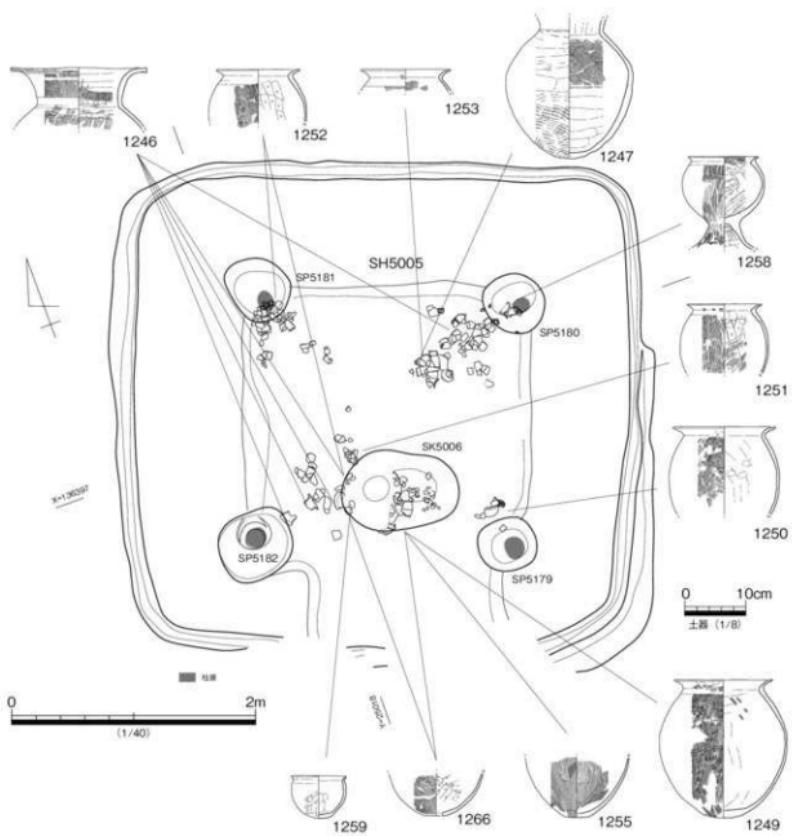
SH5005 (151 ~ 154図)

調査区北西で検出した竪穴建物である。平面形は端正な正方形で一辺4.5mを測る。床面は上層、下層の2面があり、下層は一辺3.7mと一回り小形である。

上層建物は4周に壁溝を備え、主柱穴は4基、主柱穴のラインから壁溝までの範囲が貼床により床が若干高い。ただ南側については貼床が途切れ下段部埋土が建物南壁付近まで存在する。建物床面中央やや南寄りに長さ1m、幅0.6mの楕円形の炉跡SK5006がある。炉底面には厚さ1cm弱の炭層が堆積する。建物の埋土は暗褐色系のブロック土であり、廃絶にあたっての埋め戻しを示す。また図に示したように下段部を中心と土器が多く分布することから、廃絶時に一括して投棄したものと考えられる。

下層建物は建物の東西軸に合致して主柱穴を2基配置する2本柱竪穴建物である。炉跡はSK5006の西側に隣接する位置で検出したことから、建物拡張にあたっての火處は継承されたものといえる。ただ、國化可能な出土遺物は土器少量(1256・1257・1260・1269・1271)・石錐(1274)・玉(1272)である。

1246~1248は弥生土器壺である。1246は肩が張る胴部から頭部が屈曲して直立し、上端で緩やかに屈曲して口縁部が大きく水平に開く形態である。口縁端部はわずかに肥厚して面取りする。1247は最大径が胴部中ほどで、丸底化が進んだ形態である。外面に粗いタタキ目を残し器壁が厚い。

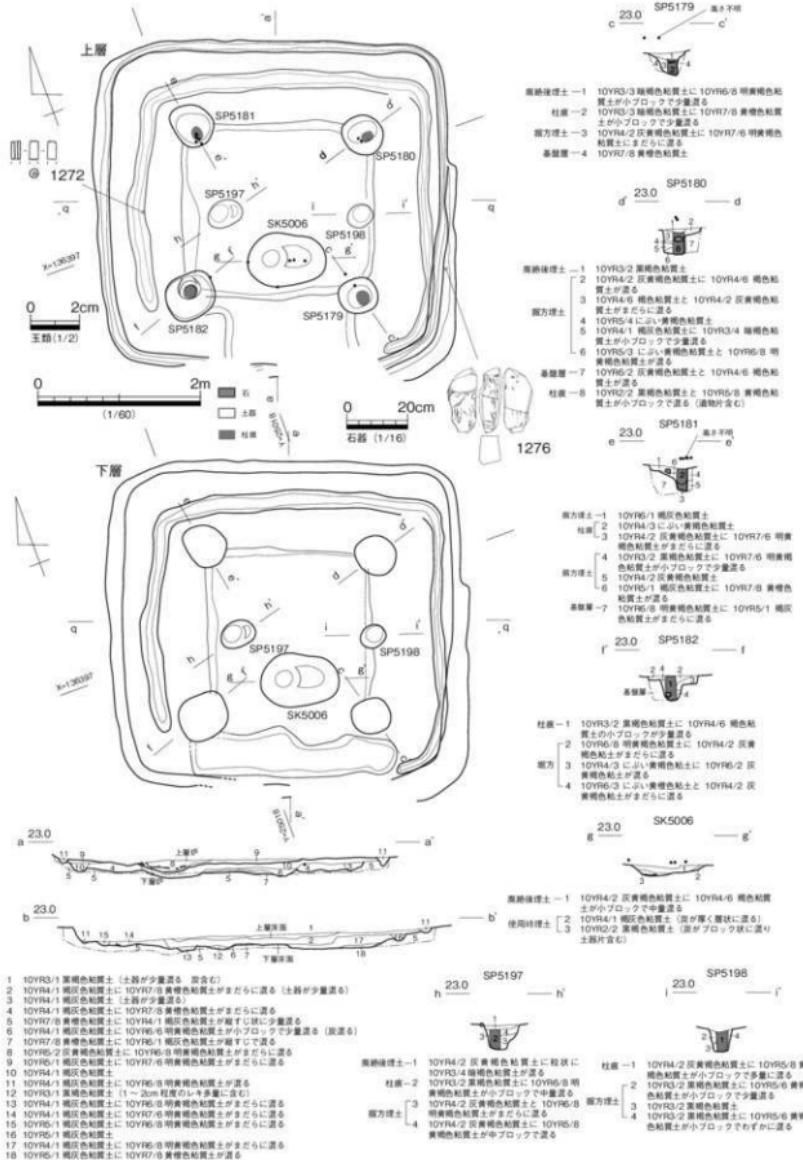


151図 5区 SH5005 上層・下層平面面図

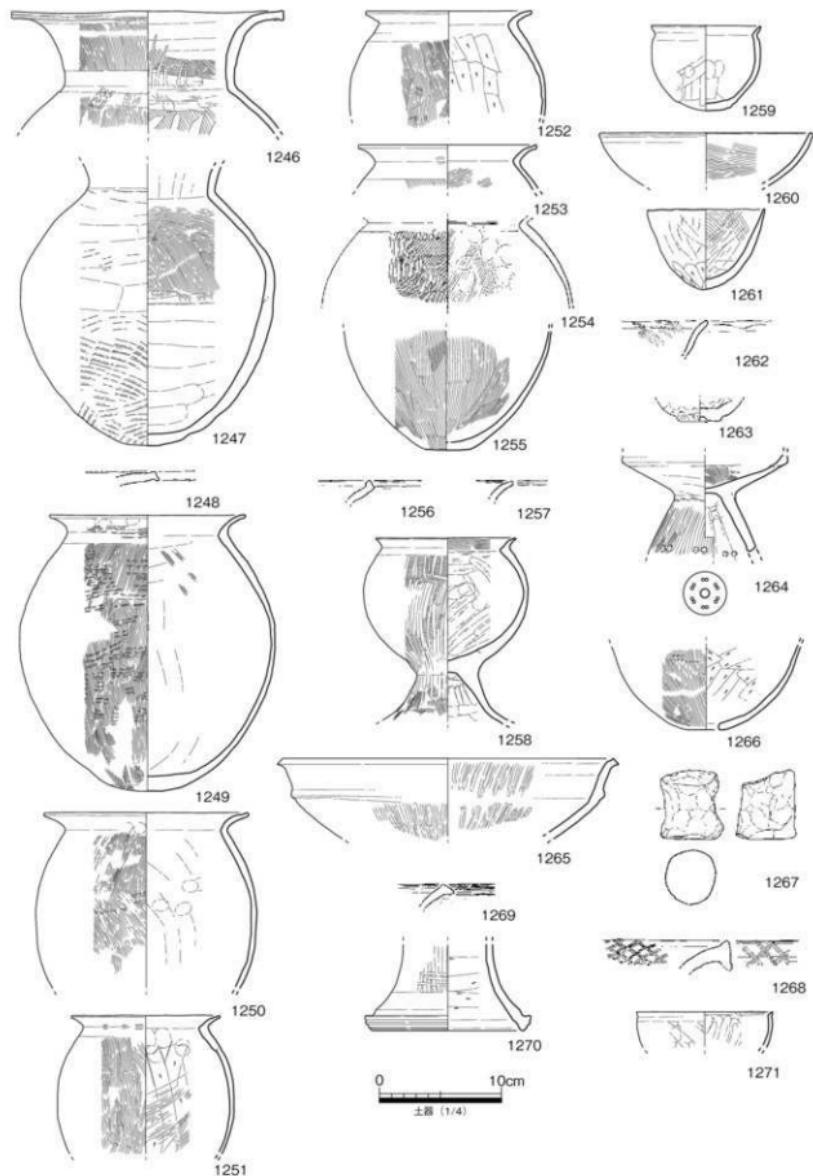
1249～1257は弥生土器壺である。いずれも口縁部が「く」の字に屈曲し最大径が胴部中ほどにある。口縁端部の面取りは低調で、拡張なく丸くおさめるものが多い。口縁部内面上端付近に強いナデを施す技法属性がほとんどどの口縁部に認められる。

1258～1263は弥生土器鉢である。1258・1259は口縁部が一旦括れて短く外反する形態である。1258は裾が大きく開く脚台が付属する。1259はほとんど輪郭稜線が欠落した平底である。1260は口径が器高の2倍以上ある大形で皿状の鉢。口縁端部を面取りする。1261は口縁が器高の2倍未満の尖底鉢である。

1264・1265は弥生土器高杯である。1264は脚部が直線的に開き2個1対の円孔を6単位施文するもので、小形の杯部から口縁部が直立する形態である。



152 図 5 区 SH5005 上層建物遺物出土状況図

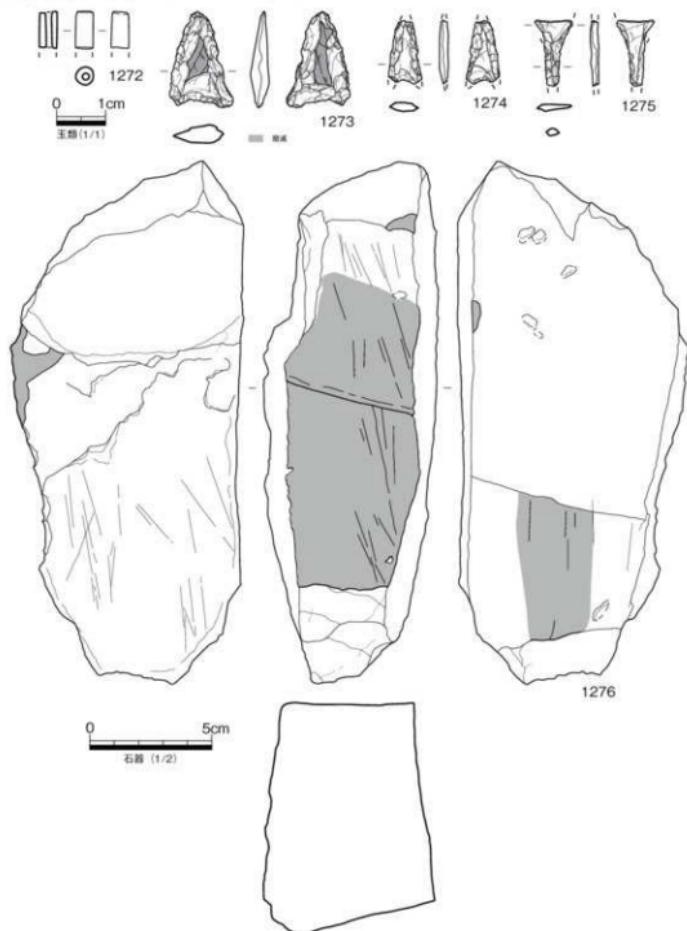


153図 5区 SH5005 出土遺物実測図 (1)

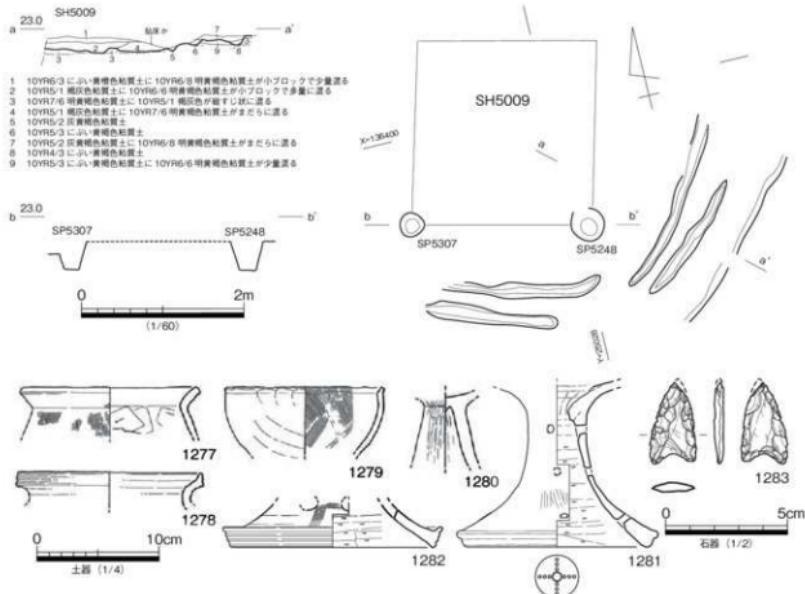
1266は底面に直径2cmほどの焼成前穿孔をもつ甌である。内面はヘラケズリ調整を行う。1267は中実の支脚である。1268～1270は混在の弥生土器。1271は下層建物出土の鉢である。

1272は碧玉製の管玉である。下端部は欠損なのか未加工状態なのは判別できない。1273・1274はサスカイト製の打製石錐である。いずれも凹基式である。1275はサスカイト製の打製石錐である。下端の作用部は欠損する。1276は安山岩製の砥石である。表裏側面が砥面となり擦痕が観察できる。

以上、SH5005は上層建物出土土器のうち壺・甌の球胴化や丸底に近い底部形態、1259・1261の尖底・丸底の鉢などから上層建物の廃絶時期が弥生時代終末期古相に、また1260の鉢から下層建物の廃絶時期を後期後半新相に位置づけることができる。



154図 5区 SH5005 出土遺物実測図（2）



155図 区SH5009 平面図・出土遺物実測図

SH5009 (155図)

調査区東北で検出した多角形堅穴建物である。主柱穴は調査区内で2基所在したが、他は調査区外の擾乱範囲にあり、4本主柱の構造と推定する。並走する2条の壁溝は同じ位置での複数回の建て替えを示す。現存する壁溝と柱穴との位置関係からみて、直径約8mの平面規模をもつ建物と思われる。

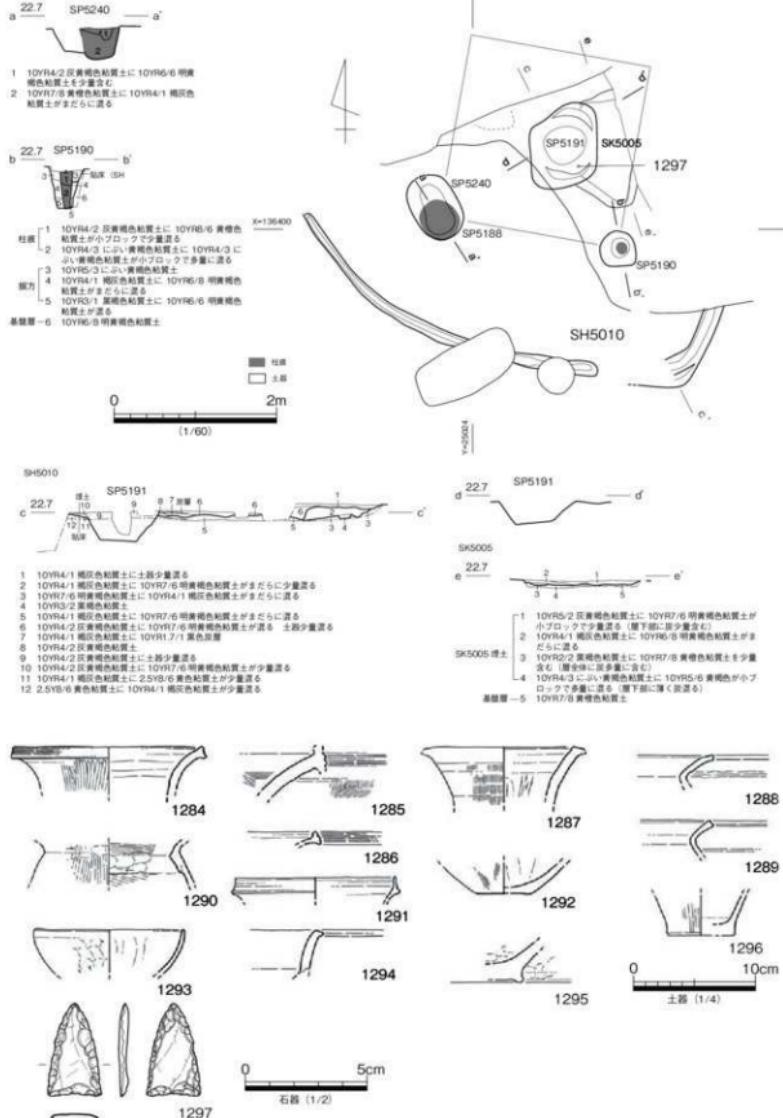
断面1・2層が埋土、4層が貼床層である。4層上面が本来埋土7層の下面と同じ高さであったと推定し、有段部を想定する。主柱穴の規模は直径0.41m、深さ0.35mで柱間は2.24mを測る。

1277・1278は弥生土器甕である。1278は口縁部を上方に拡張し端面に凹線文を施す。1279は弥生土器鉢、1280～1282は弥生土器高杯である。1281は高松平野西部の香東川下流域産の高杯で、円盤充填の部材は剥離するが、脚端部の凹線、裾部の装飾的な円形透かしなど、在地土器にない特徴がある。1283は凹基式のサヌカイト製打製石鎌である。

以上、SH5009は1278の甕、1281の高杯などから弥生時代後期前半新相に位置づけられる。

SH5010 (156図)

SH5001及びSH5009床面で検出した堅穴建物である。平面不整形で東壁は直線的に北に向かい、南壁は緩やかにカーブしながら西に向かう。主柱穴は2基検出したが、調査区外の擾乱部に2基を想定して4本主柱の構造と考える。床面中央付近で長さ1.14m、幅0.94m、深さ0.35mの土坑(SP5191)を検出した。埋土は暗灰黄色系のブロック土。その東側には浅く広い掘方をもつ土坑SK5005が付属する。



156図 5区SH5010 平断面図・出土遺物実測図

SK5005 は埋土中に薄い炭層が数層介在する。このことから両者が当該建物の炉跡及びその付属遺構として機能したものと考える。一方、2基の土坑の西側に隣接して床面が被熱によって赤色化した範囲が認められた。土坑と同時に使われたかどうか不明だが、地床炉も存在した可能性がある。

出土遺物は SH5001 や SH5009 による掘削から免れ東南隅で出土した土器のほか、土坑や柱穴からそれぞれ出土した。ただし SH5009 調査時に若干の掘り残しがあり、東南隅の1層とした部分で出土した土器(1228・1292)は、本来 SH5009 に含まれていた可能性が高い。

1284～1287 は弥生土器壺である。1284～1286 は外反する口縁部の端部を上下に拡張し、端面に凹線文を施すものである。1287 は細長く伸びた頸部から口縁部が緩やかに外反し、端部を内外面に拡張する長頸壺である。頸部外面には横方向のナデが顯著で稜線を形成する。

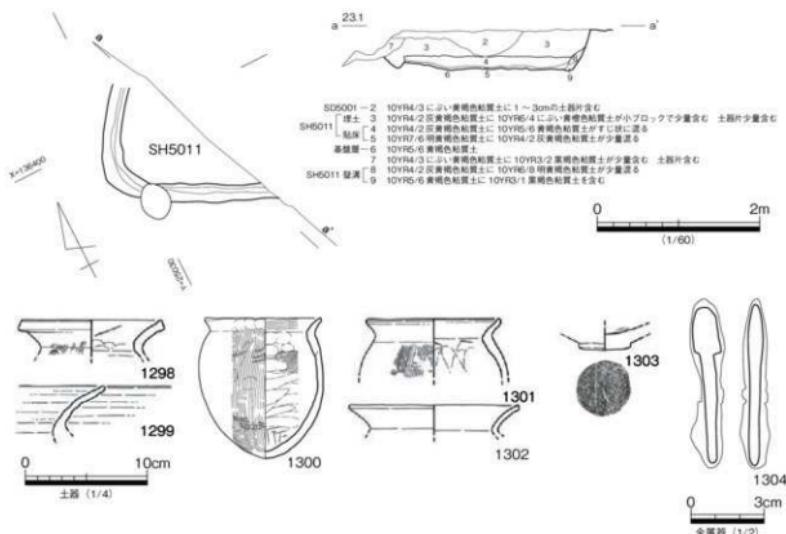
1288～1292・1296 は弥生土器甕である。1288・1289 は口縁部が「く」の字に屈曲する形態だが、屈曲は無線。口縁端部を若干拡張して面を取る。1291 は口縁が二重となる形態で外面に強いナデを施す。

1294 は弥生土器高杯の口縁部である。端部を外につまみ出す形態である。1297 は平基式のサヌカイト製打製石鏃である。素材面を大きく残し周縁加工を施す。長さ 5cm 弱の大型品である。

以上、SH5010 は壺口縁部に凹線を施すものが多く、頸部に強いナデをもつ長頸壺の存在など、弥生時代後期前半の属性をもつ土器が多いことから、当該期に機能し廃絶したものと考えられる。SH5009 に先行する建物とした重複関係とも矛盾しない。

SH5011 (157 図)

調査区北東隅で検出した方形の堅穴建物である。大半が調査区外に所在し、西隅のみを調査した。深さ 0.45 m で壁際に壁溝が巡る。調査区東壁断面所見では図の4層に薄く筋状に異層の介在があることから、4 層を貼床と想定した。図化した出土遺物はすべて 3 層から出土したものである。



157 図 5 区 SH5011 平断面図・出土遺物実測図

1298・1299は弥生土器壺である。1298は頸部が「ハ」の字となり口縁部が強く屈曲して斜め上方に開く形態で、口縁端部は若干上下に拡張し端面に強いナデによる窪みを巡らせる。1299は二重口縁壺である。強い内傾から大きく反転して斜め上方に開く口縁上方部片で、内外面に稜を形成するほどの強いナデを施す。

1300～1302は弥生土器壺である。1300は器壁が厚手で頸部のくびれが弱く、口縁部が短く屈曲して端部が尖る。やや胴長で底部は尖底となる。1301も同様の器形だが、口縁部は丸くおさめる。1302は口縁部が長く、緩やかに外反する形態である。1303は弥生土器鉢の平底片である。

1304は断面方形で棒状の鉄器である。ヤリガンナの柄部の可能性があろう。

以上、SH5011は出土した土器に1299の二重口縁壺や1300の尖底の壺など弥生時代終末期の新相に該当するものがみられることから、その時期に埋没したものと考える。

SH5012（158図）

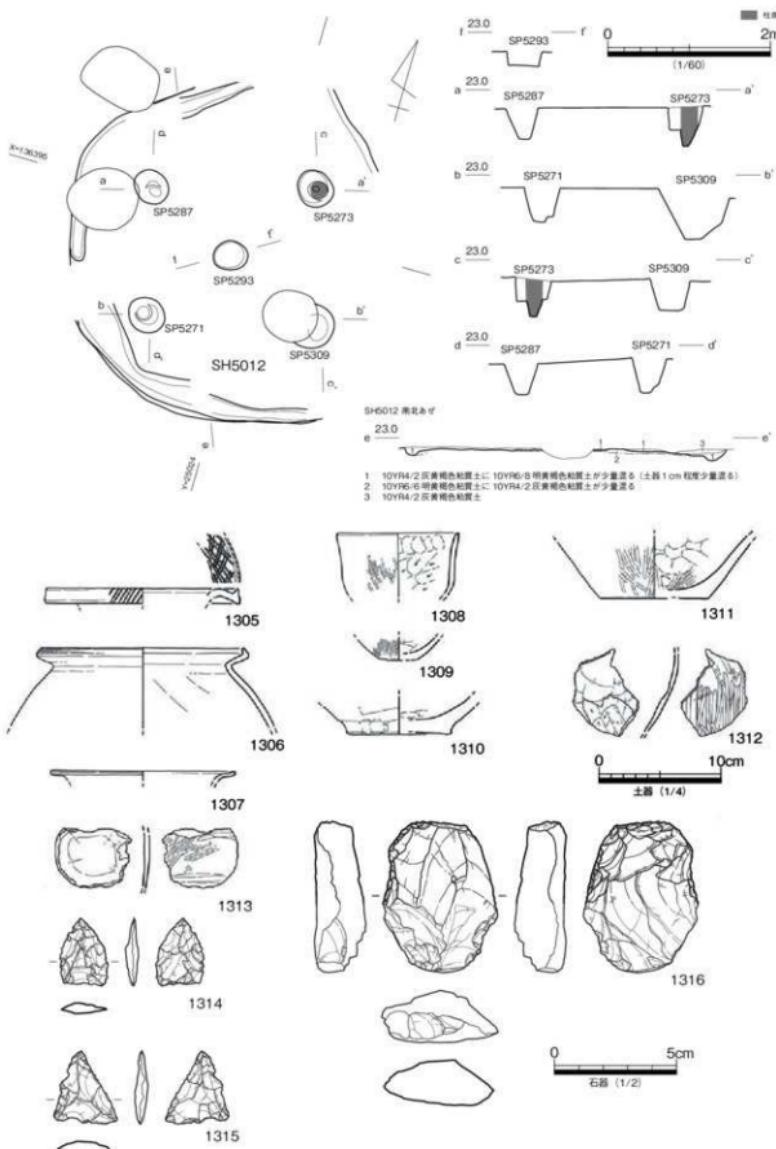
調査区中央部で検出した直径4.2mの円形堅穴建物である。SH5001・SH5002・SH5003CDの建物に先行する。重複する不明遺構SX5005との先後関係は、調査中においては不明であった。

掘方が浅く、床面の深さは最大でも0.05m。主に壁溝と主柱穴の配置で平面形を把握した。壁溝は幅0.2m、深さ0.06mである。主柱穴は4基で、東西がやや長い長方形に配する。床面中央に直径0.43m、深さ0.14mの浅い土坑(SP5293)が付属する。土坑は底が丸く、埋土は断面1層と同質で、埋土の一部に炭化物塊を含むが炭層は形成しない。

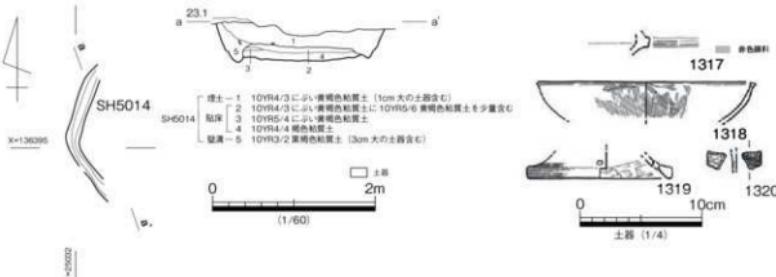
出土遺物は埋土中及び柱穴から出土した。

1305は直立する頸部から口縁部が大きくカーブして外反し、端部を上方拡張してヘラ描き斜線文を施し、口縁部内面に櫛描き斜格子文を施す壺である。1306は薄手の壺で口縁部上方拡張し端面に細い四線文を施すものである。1307は薄手の壺口縁部片、1308は小型の鉢、1309～1311は底部片で、そのうち1310・1311は安定した平底である。1312・1313は焼成剥離痕をとどめる壺体部片である。外面に顯著なヘラミガキを施す。1314・1315はサスカイト製打製石鐵である。いずれも平基式で、左右非対称により未製品と考える、1316はサスカイト製の石核である。上端に自然面を残し、厚さ2cm以上の板状素材から剥取した剥離面を表裏に僅かにとどめる。周辺は敲打による潰れが目立ち、両極打撃もしくは稜線敲打による剥離を進めた様子がうかがえる。なお、磨滅痕は認められない。

以上、SH5012は出土遺物に四線文出現期ごろの土器があることから弥生時代中期後半古相に廃絶した堅穴建物と考える。



158図 5区 SH5012 平断面図・出土遺物実測図



159図 5区 SH5014 平断面図・出土遺物実測図

SH5014 (159図)

調査区東壁沿いで検出した堅穴建物である。建物の端のみを検出しており、約130度の屈曲部を確認した。方形または多角形の平面形をもつものと考えられる。床面の深さは0.48mで、壁際に幅0.2m、深さ0.3mの壁溝が巡る。東壁断面の所見により図の2～4層を貼床と推定する。

出土遺物は少量である。1317は弥生土器長頸壺腹部片で最大径部に断面「M」字状の突帯を貼付する。突帯上端部には赤色顔料塗布の痕跡をとどめている。後章のとおり顔料は「ベンガラ」との分析結果が出ている。1318は浅い皿状の弥生土器鉢である。口縁部が端部付近で垂直に立ち上がり、端部を丁寧に面取りして仕上げる。1319は弥生土器高杯脚端部片である。端部を拡張し擬凹線文を施す。1320の器種は不明だが線刻文を施す弥生土器片である。

以上、SH5014は出土土器に弥生時代後期前半に特徴的な赤色顔料塗布の長頸壺が含まれ、そのほかの土器も同時期の土器とみて矛盾がないことから、当該期に廃絶した建物と考える。

SH5015

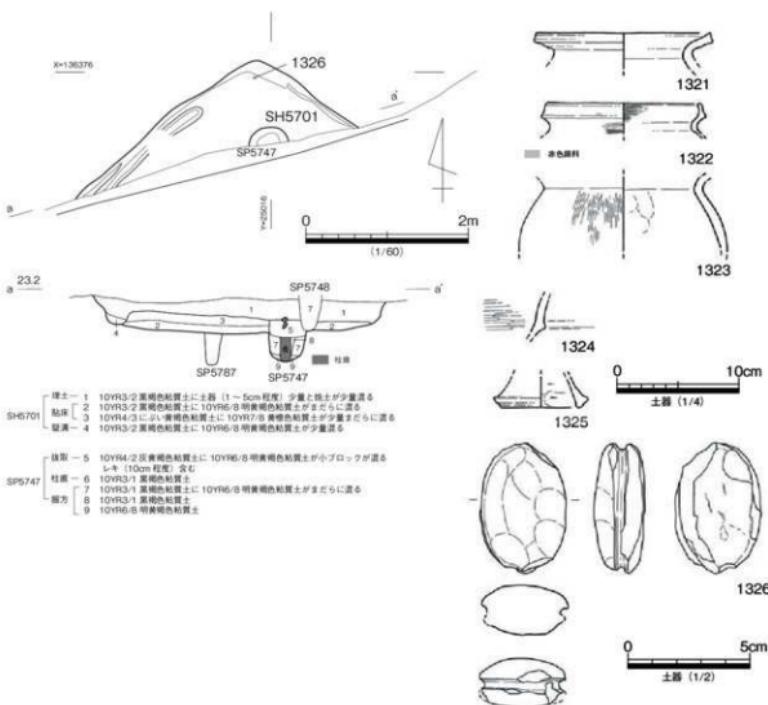
SH5001に切られる堅穴建物の一部分のみを検出した。方形の建物とみられるが、図化可能な出土遺物がなく、詳細は不明である。床面の深さは0.09m、壁間に幅0.15m、深さ0.06mの壁溝が巡る。

SH5701 (160図)

調査区南壁際で検出した堅穴建物である。方形の建物のコーナー部分及び主柱穴の一部を確認した。規模は不明である。床面の深さは0.45m、壁間に壁溝が巡る。図の2・3層が貼床、その上面から主柱穴SP5747が掘削される。柱痕は直径13cmである。貼床上面で土錐1点が出土した。

1321～1326はすべて埋土中から出土した遺物である。1321は内傾する頸部から口縁部が強く反転する器形の弥生土器壺である。口縁部は丁寧に面取りし四線文風の強いナデを施す。1322・1323は弥生土器壺である。2は口縁部が屈曲して上方に立ち上がる形態で内外面に赤色顔料塗布の痕跡がある。後章のとおり顔料は「ベンガラ」との分析結果を得ている。備中地域の搬入品と考えられる。1323は肩が張る器形で器壁が厚手の胴部をもつ壺である。1324・1325は弥生土器高杯である。1324は口縁部が屈曲する器形、1325は脚部片で脚端部を大きく拡張して四線文を施す。

1326は土錐である。梢円形を呈し両小口は尖り気味に仕上げる。側縁に幅8mm、深さ3mmの溝を



160図 5区 SH5701 平断面図・出土遺物実測図

焼成前に施す。

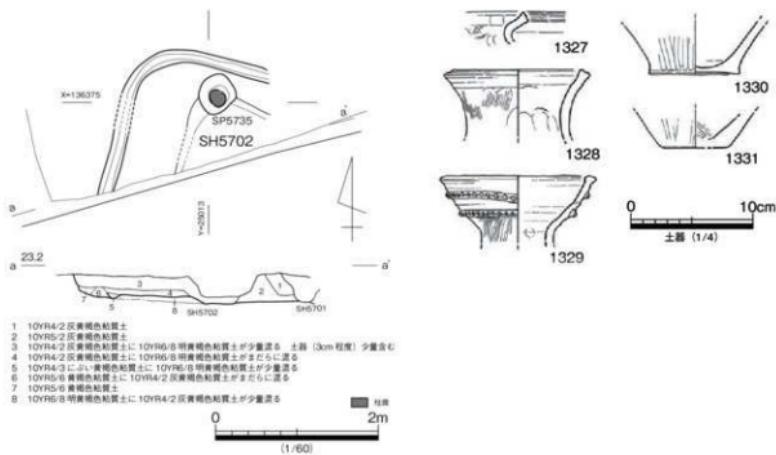
以上、SH5701は出土土器のうち1322の備中系壺や1324の屈曲する口縁形態の高杯などから弥生時代後期前半新相に位置づけられ、当該期に廃絶したものと考えられる。

SH5702 (161図)

SH5701と重複する方形の堅穴建物である。SH5701の完掘後に調査区南壁際において建物の北西隅部と主柱穴1基を確認した。検出面から掘方底面までの深さは0.25mである。西側壁際には幅0.18m、深さ0.1mの壁溝と幅0.9m、厚さ5cmの貼床層（図の4層）がある。主柱穴SP5735は深さ0.66m、柱痕は直径20cmである。出土遺物は埋土中より出土したものである。

1327は口縁部に擬凹線文を施文する弥生土器甕口縁部、1328は口縁部が若干外反気味となる弥生土器長頸壺である。1328の口縁部付近は強いナデを施す。1329は口縁部外面に刻目突帯2条を貼付し口縁端部を内外に拡張する弥生土器細頸壺である。1329は弥生時代中期の混在品である。

以上、SH5702は出土土器の1327・1328の特徴から弥生時代後期前半古相もしくは中相に位置づけられ、SH5701に先行する当該期に廃絶した堅穴建物と考えられる。



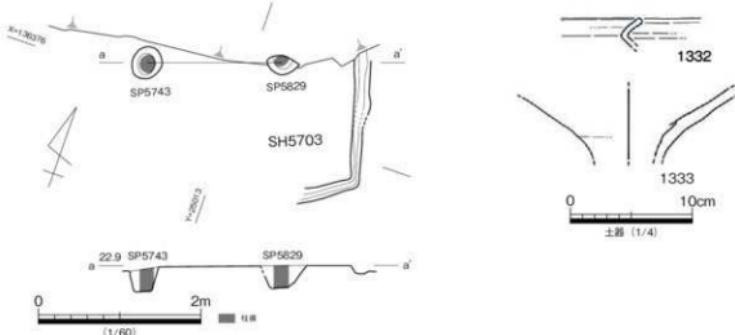
161図 5区 SH5702 平断面図・出土遺物実測図

SH5703 (162図)

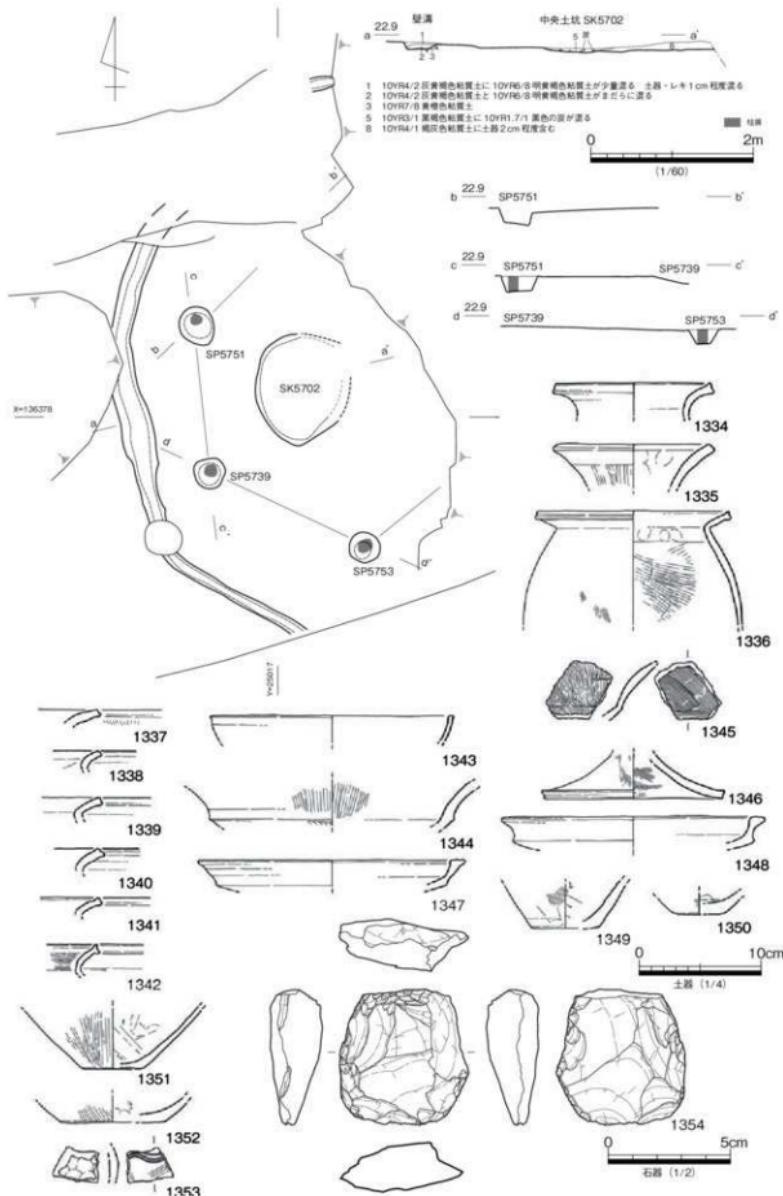
調査区南側で検出した方形堅穴建物である。南東隅部と主柱穴2基を確認した。壁溝は幅0.18m、深さ0.09m。主柱穴の柱間は1.8mである。主柱穴検出面と掘方底面までの間約3cmの厚さで貼床を確認した。SH5701に先行した建物で、南西部の壁溝が滅失している。出土遺物はいずれも貼床層から2点の土器が出土した。

1332は弥生土器甕口縁部片である。胴部と口縁部の境が鋭く屈曲し、端部を丁寧に面取りする、残存部内外面は丁寧な横ナデが顕著である。1333は内面の円盤充填粘土が剥離した弥生土器高杯片である。杯部から脚柱部にかけて緩やかなカーブを描きながら接続する。

以上、SH5703は出土土器のうち1333の高杯の形態が弥生時代中期末から後期前半に通有のものである。出土土器2点は貼床層から出土したもので、当該建物の上限を示すことから、当該建物の廃絶時期はその時期をさかのばるものではない。



162図 5区 SH5703 平断面図・出土遺物実測図



163図 5区 SH5707 平断面図・出土遺物実測図

SH5707 (163図)

調査区南側で検出した平面六角形の堅穴建物である。西側約1/3が残存し、主柱穴3基とその外側0.9mの位置に幅0.3~0.4m、深さ0.08mの壁溝が概ね主柱穴に対応する部分で鈍角に屈曲する状況を確認した。この平面形から建物全体を復元すると直径6mの規模となる。掘方床面は若干東に傾斜するがその傾斜部分を補填するように厚さ6cmの貼床層(図の8層)を検出した。なお、検出途上で当該建物を切り込む遺構として複数の遺構調査を試みたが、最終的には当該建物の埋没途上の堆積層と判断した。床面中央やや西寄りで円形の浅い土坑SK5702を確認した。規模は直径1.3m、深さ0.05mで、埋土中に炭化物塊を多く含む。当該建物に伴う炉跡と判断した。出土遺物は当該建物に本来伴うか否か明確でない東側埋土を除き、遺構検出時・中央土坑・壁溝・貼床出土のものに限定して図化した。

1334・1335は弥生土器壺である。1334はやや内傾する頸部から口縁部が緩やかに反転し口縁端部を拡張して強いナデを施したものである。1335は細い頸部から口縁部が大きく外反し端部を面取りする。1336~1342は弥生土器壺である。1336はやや肩が張る胴部から口縁部が鋭く屈曲し、口縁端部を若干拡張して擬四線文を施すものである。胴部は薄手だが残存部内面はハケ目調整で仕上げる。1337~1342は口縁部片で端部を強いナデにより崖ませるか、面取りする。1343は弥生土器高杯または鉢。1344~1348は弥生土器高杯である。1344・1345は口縁部が屈曲して大きく外反する形態、1347・1348は口縁部が短く外反する形態で、端部を外に拡張して水平面をもつものである。1349~1352の底部片はいずれも安定した平底である。1353は外面に線刻文を持つ弥生土器壺胴部片である。

1354はサヌカイト製の石核である。周縁に顯著な敲打を施し打面を整える。

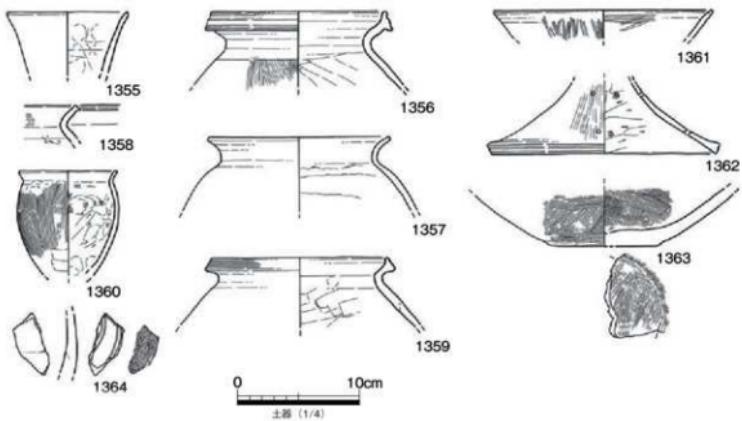
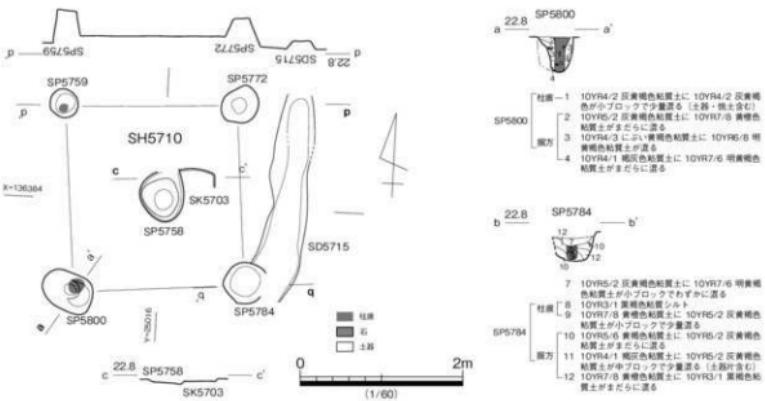
以上、SH5707出土遺物は甕や高杯の形態から弥生時代後期前半に属するものであり、当該建物は後期前半に機能し廃絶したものと考える。

SH5710 (164図)

調査区中央やや西側で主柱穴4基の配置と、貼床下部に掘削された溝SD5715をもとに復元した堅穴建物である。中央に位置する土坑SK5703は直径0.45m、深さ0.04mと浅く、炭化物を埋土に含み、一部底面が被熱し赤色化していたことから、中央土坑と判断した。建物の平面規模は一辺3.5m以上と推定される。出土遺物は土坑・柱穴・溝から出土した。

1355・1356は弥生土器壺である。1355は薄手で口縁部が斜め上方に直線的に延びる形態の直口壺である。2は頸部が短く口縁部にかけて緩やかにカーブしながら反転する形態の壺で、口縁部を上下に大きく拡張し四線文を施すものである。1357~1360は弥生土器壺である。1357は胴部上端から口縁部が短く直立してから外反する形態で端部の拡張はない。内面は胴部上端までヘラケズリを施す。1359は口縁部が短く屈曲し端部を上下に拡張して四線文を施すもので、内面のヘラケズリは胴部上端まではとどかない。1360は小形の甕で口縁部が短く外反する。1361は薄手で口縁部が斜め上方に直線的に聞く鉢である。外面に細い継位のヘラミガキを施す。1362は高杯脚部で裾が大きく開き、端部を拡張して擬四線文を施す。裾部に上下2段に細い穿孔を施す。1363は安定した平底の壺底部片、1364は器種が不明だが外面に線刻文をもつ体部片である。

以上、SH5710の出土遺物は甕形態及び高杯脚部形態から弥生時代後期前半に所属するものである。そのうち、貼床下位の溝で出土した1359の甕は後期前半古相に該当する。したがってSH5710は弥生時代後期前半に機能し、廃絶したものと考える。



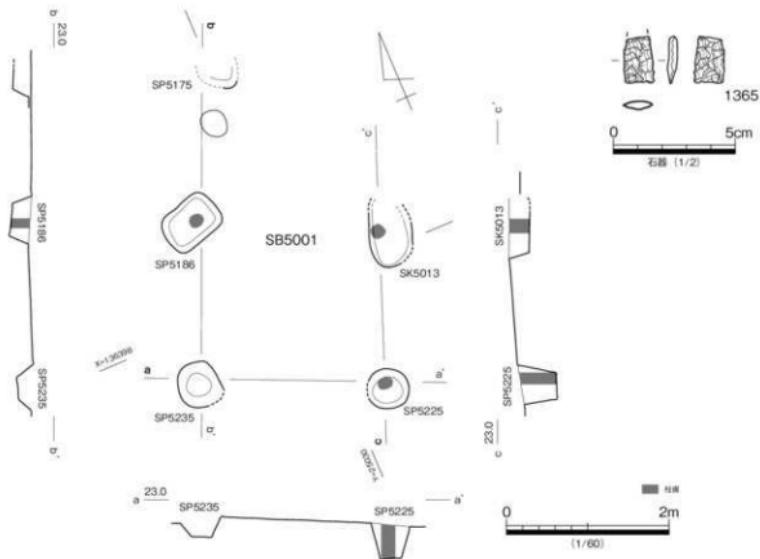
164 図 5 区 SH5710 平断面図・出土遺物実測図

2) 掘立柱建物

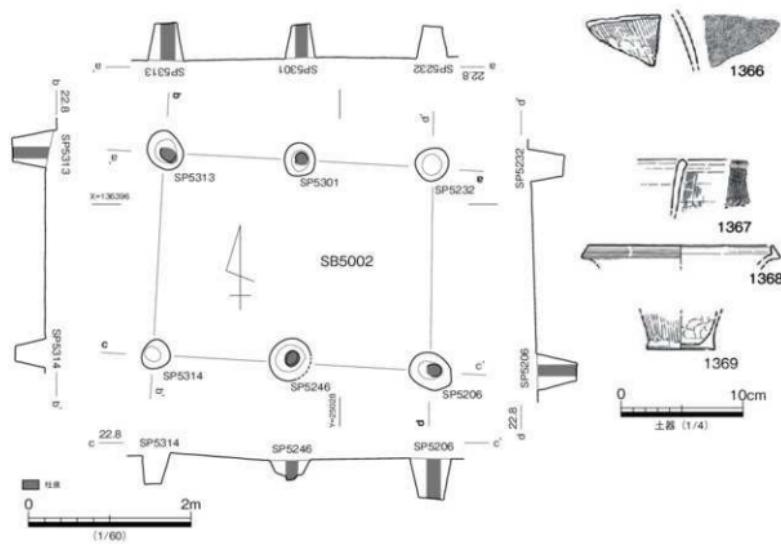
SB5001 (165 回)

調査区北東端で検出した掘立柱建物である。梁間1間(2.3m)×桁行2間(約4m)以上で主軸方位は北から24度東に偏る。柱穴は最大で長径0.9m、深さ0.25m、柱痕は直径15cmである。柱穴は円形のものや隅丸方形のものが混在する。隅丸方形の柱穴SP5186は主軸方位が建物主軸とは一致しない。柱穴の埋土は黄色土ブロックを多く含む褐色系シルトで、他の掘立柱建物と同じである。

埋土中から出土した土器片は小片につき固化していないが、柱穴SP5235 から 1365 のサスカイト製打製石錐 1 点が出土した。



165図 5区 SB5001 平断面図・出土遺物実測図



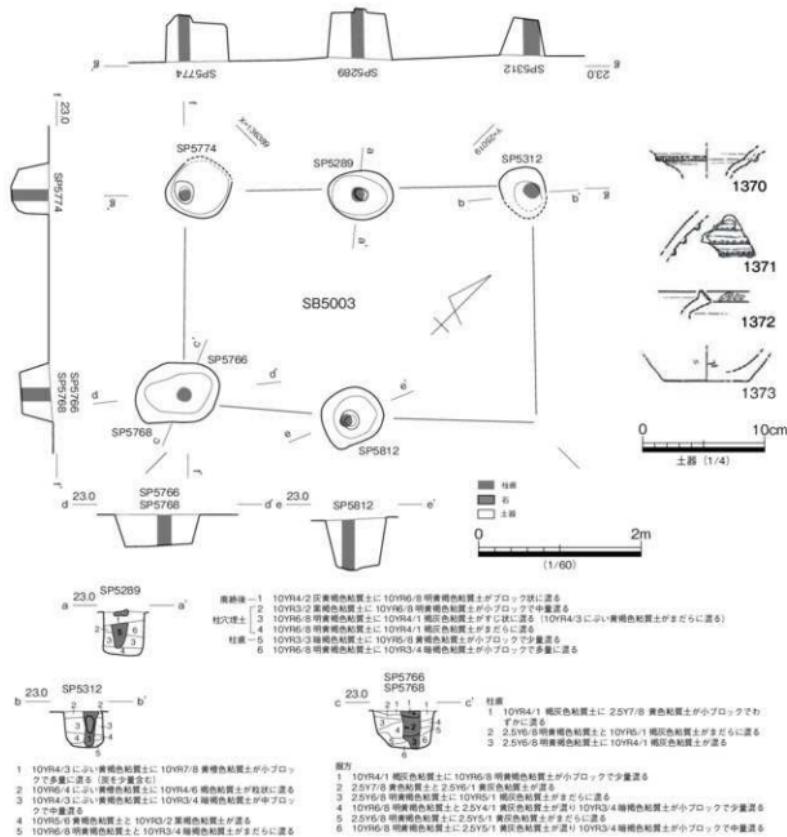
166図 5区 SB5002 平断面図・出土遺物実測図

SB5002 (166図)

調査区東側中央で出土した掘立柱建物である。梁間1間(24m)×桁行2間(4.2m)以上で主軸方位は北から86度西に偏る。柱穴は最大で直径0.53m、深さ0.46m、柱痕は直径18cmである。柱穴の埋土は黄色土ブロックを多く含む褐色系シルト。このうち柱穴SP5313は後述の不明造構SX5005と重複し、それに後出する。そのほかの柱穴は堅穴建物SH5003A~Dのすべてに先行する。

1366~1369は柱穴出土の弥生土器である。1366はSP5232出土の壺胴部片で最大径部よりやや上に列点文を施す。1367はSP5232出土の長頸壺口縁部片である。頭部下端に刺突文を巡らせる。1368はSP5301出土の口縁部を上方に大きく拡張して凹線文を施す壺である。1369は薄手で平底の壺底部片で、外面に継ぎ位の丁寧なヘラミガキを施し、内面はヘラケズリ調整である。

以上、SB5002は1367・1368の土器から弥生時代中期後半新相に位置づけられる。



167図 5区 SB5003 平面図・出土遺物実測図

SB5003 (167図)

調査区中央付近で検出した掘立柱建物である。梁間1間(2.6m)×桁行2間(4.3m)以上で主軸方位は北から45度東に偏る。北東隅の柱穴は後世の攪乱により滅失する。柱穴は最大で長径1.05m、深さ0.62m、柱痕は直径18cmである。柱穴SP5766は主軸を建物軸に合わせた隅丸長方形を呈すが、他の柱穴は円形基調である。柱穴の埋土は黄色系土と褐色系土がブロック状に混じる土で、柱痕は上部に柱抜取り後の土器・レキの投棄がみられ、少量の炭化物が混じる。

掘立柱建物SB5007の柱穴SK5704と当該建物柱穴SP5766の掘方が重複しており、調査時には当該建物が後出と判断していたが、下記の出土遺物を検討した結果、当該建物が先行する可能性が高い。

柱穴SP5768より1370～1373の弥生土器が出土した。1370は頭部が強くくびれ口縁部が段状屈曲して立ち上がる形態の細頸壺である。段部に刻目突帯1状を施す。1371は口縁部が斜め上方に大きく開く形態の壺で、4条以上の刻目突帯を施す。1372は壺口縁部片である。端部を上下に拡張し斜線刻目を施す。1373は安定した平底片である。

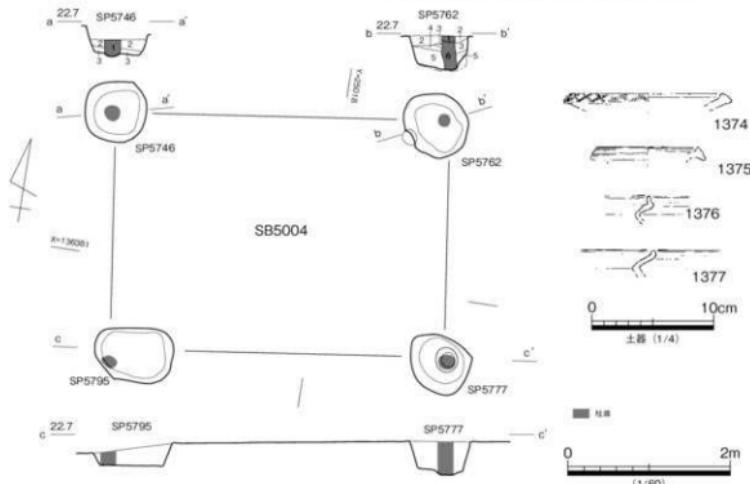
以上、SB5003出土遺物は口縁部に凹線文を施していない1372の壺など中期後半古相に位置づけられるものもあるが、1370の細頸壺口縁が段状に屈曲する特徴は同新相に位置づけられる。したがって当該建物の廃絶時期をその時期と判断する。

SB5004 (168図)

調査区南側で検出した掘立柱建物である。梁間1間(3.0m)×桁行1間(4.2m)で主軸方位は北から82度東に偏る。柱穴は最大で直径1.0m、深さ0.54m、柱痕は直径18cmである。柱穴SP5795は隅丸長方形を呈し主軸が建物軸に合致する。また、柱穴SP5746の平面形も隅丸方形に近い。各柱穴の埋

柱底
① 10YR4/2 黄褐色粘質土に 10YR6/6 明黄褐色粘質土
層と小ブロックで多量に混る
② 10YR4/3 黄褐色粘質土に 10YR6/8 黄褐色粘質土が
層方
中ブロックで少量混る
③ 10YR4/3 黄褐色粘質土と 10YR4/4 黄褐色粘質土が混る

柱底
④ 10YR2/3 黄褐色粘質土に 1cmの小シルトを含む
⑤ 10YR3/2 黄褐色粘質土に 10YR4/6 黄褐色粘質土が小ブロックで少量に混る
⑥ 10YR3/2 黄褐色粘質土と 10YR4/6 黄褐色粘質土が混る
層方
⑦ 10YR6/4 に少しうれ状の黄褐色粘質土と 10YR6/8 明黄褐色粘質土が混る
⑧ 10YR3/4 黄褐色粘質土に 10YR6/8 明黄褐色粘質土が小ブロックで少量混る
⑨ 10YR4/6 黄褐色粘質土に 10YR4/3 黄褐色粘質土がブロック状に混る



168図 5区SB5004 平断面図・出土遺物実測図

土のうち掘方は暗褐色系ブロック土、柱痕が黒褐色系土である。

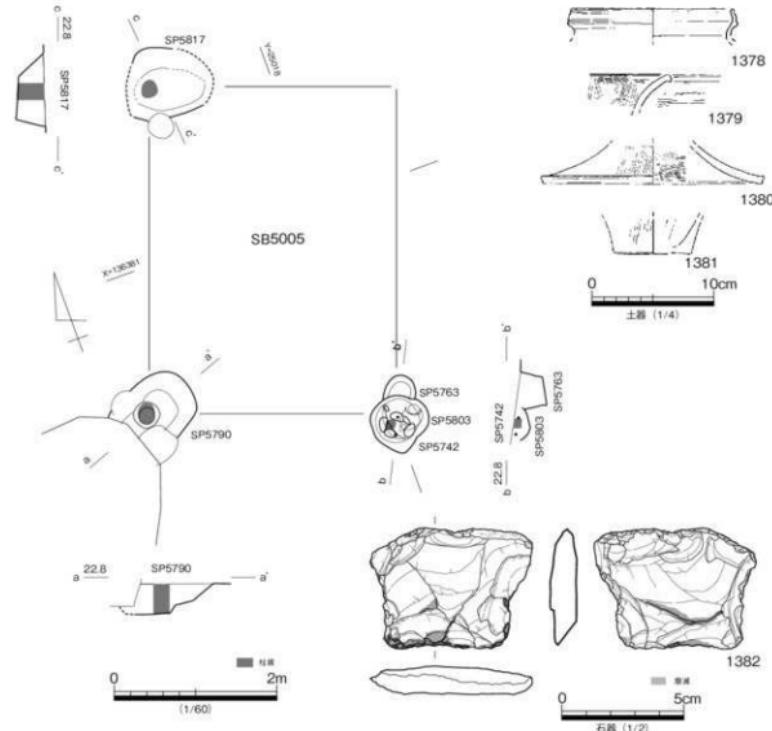
埋土中より弥生土器片が少量出土した。図の 1374・1377 は柱穴 SP5746、1375・1376 は柱穴 SP5746 で出土したものである。

1374 は口縁部が大きく聞く形態の壺で口縁端部を拡張し 2 条 1 対の半裁竹管工具による斜格子文を施文する。1375 は口縁部を上下に拡張し端面に凹線文 2 条を施文する壺口縁部片である。1376 は口縁部が「く」字に屈曲して外反し端部を上方につまみ上げ、端面に強いナデを施す壺口縁部片である。1377 は口縁部が鋭く「く」字に屈曲し端部を上方につまみ上げる形態の壺口縁部片である。これらの土器は凹線文出現期の土器群である。

以上により、当該建物は弥生時代中期後半古相に位置づけられる。

SB5005 (169 図)

調査区南側で検出した掘立柱建物である。梁間 1 間 (3.05 m) × 衍行 1 間 (4.0 m) で北東側の柱穴は擾乱により滅失する。主軸方位は北から 20 度東に偏る。柱穴は最大で長径 1.08m、深さ 0.36m、柱痕は直径 20cm である。北側の柱穴 SP5817 は掘立柱建物 SB5004 や竪穴建物 SH5710 主柱穴 SP5786 に



169 図 5 区 SB5005 平断面図・出土遺物実測図

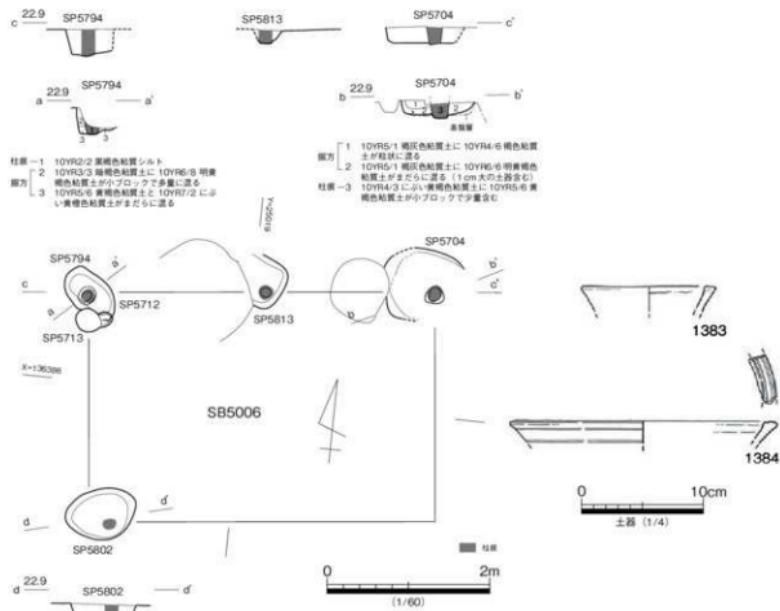
より掘形上部を減失するが、底面付近は残存しており明確な柱痕が確認できた。南東側の柱穴 SP5742 は 1378 ~ 1380 の土器が出土したが、SB5004 出土土器より新しい時期のものであり、上記の重複関係と矛盾する。そこで調査時の写真等を点検した結果、その北に重複する柱穴 SP5763 及びその周りに柱穴埋土と思われる堆積層が存在しており、SP5763 を柱抜取り痕とみて SP5742 に先行する大形柱穴の存在が復元できた。すなわち、SP5742 は当該建物柱穴の柱抜取り後の窪みに堆積したものか、または別の重複する柱穴ということになる。出土土器の時期差を考慮すると、後者である可能性が高い。

1378 ~ 1380 は柱穴 SP5742 出土の土器である。1378 は橙色系胎土の複合口縁甕、1379 は口縁部を下方につまみ出す高杯口縁部片、1380 は裾端部をナデにより窪ませ裾が大きく開く高杯脚部片である。これらは弥生時代後期後半古相に属する。1381 は柱穴 SP5763 から出土した甕底部片である。胴部下半から底部にかけて突出する器形で、器壁は薄手で外面はヘラミガキ、内面は弱いヘラケグリで調整する。同中期後半に属する。1382 はサヌカイト製打製石臼である。高さに対して横幅が短く側縁の抉りが緩い、弥生時代後期前半に特徴的な形態である。刃部には強い磨滅痕を認める。

以上により、当該建物は重複関係から SB5004 に先行するが出土土器から弥生時代中期後半をさかのぼるものではないと判断できる。

SB5006 (170 図)

調査区中央の柱穴集中区域で検出した掘立柱建物である。梁間 1 間 (2.8 m) × 衍行 2 間 (4.3 m) で衍行の柱間は 2.2 m である。南東側の柱穴は擾乱により減失する。主軸方位は北から 84 度東に偏る。



柱穴は最大で直径 0.9m、深さ 0.35m、柱痕は直径 16cm である。図上の柱穴形状は隅丸方形または不整形で柱穴の主軸は建物主軸と一致しないようにみえるが、いずれの柱穴も他遺構との重複により本来の平面形状をとどめていない。近い時期の遺構との重複関係としては、柱穴 SP5704 が掘立柱建物 SB5003 の柱穴 SP5812 と重複しそれに先行する。

1383 は柱穴 SP5704 出土の壺口縁部片である。口縁部が斜め上方に短く外反するタイプで、拡張した端部は上面の強いナデにより窪む。1384 は柱穴 SP5794 出土の鉢または高杯口縁部片である。口縁部を拡張し、端面に凹線文 2 条を施文する。口縁部下にも凹線文を施文する。

以上の出土土器のうち、1384 の口縁端面に凹線文を施す鉢は弥生時代中期後半新相に特徴的であることから、当該建物の廃絶時期を示すものと考える。

SB5007 (171 図)

調査区中央付近で検出した掘立柱建物である。梁間 1 間 (4.5 m) × 衍行 1 間 (5.0 m) で主軸方位は北から 19 度東に偏る。柱穴は最大で直径 1.25m、深さ 0.4m である。いずれも 1m 超の掘方をもつ大形柱穴で構成されるが掘方の形状は隅丸方形や円形と一定しない。柱痕は中心から偏るものが多いが、柱穴 SP5299 では中心に柱痕があり柱を安定させるため 20cm 大のレキが柱に接する掘方内に配置されていた。柱は抜き取られたものと思われるが、その後にレキが内側にせり出したものと考えられる。柱痕は直径 18 ~ 20cm で、そのほかの柱穴も同様のサイズで柱痕を検出した。なお、南西の柱穴 SK5704 は掘立柱建物 SB5003 の柱穴 SP5813 の掘方を切っており、SB5003 に後出するものと考えられる。

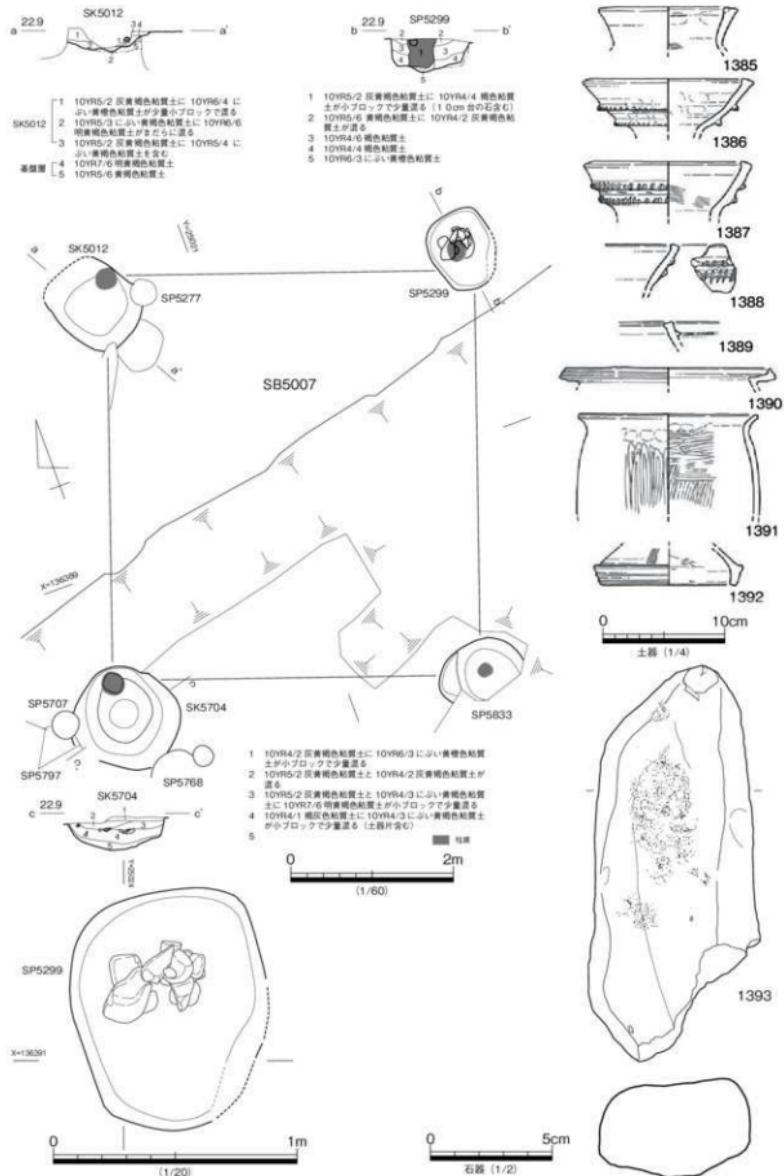
1385 ~ 1392 は各柱穴出土の弥生土器である。1385 は口縁端部を拡張する直口壺、1386 ~ 1388 は口縁部に数条の刻目突帯を貼付する細頸壺である。1389 は口縁部が内傾し、口縁部下に細い刻目突帯を貼付する。1390 は口縁部が水平近く屈曲し、拡張した端部に凹線文を施文する甕、1391 は口縁部が如意状に短く外反する甕で、中期前半の混在品である。1392 は高杯脚部片である。裾端部を下方に拡張して面取りし浅い凹線文を施文する。脚柱部へ内湾気味に立ち上がり外面に櫛描き文（3 条 1 単位）を縱位に 1 条施文する。外面に赤色顔料を塗布する。1393 は安山岩製の叩石である。底面の図下方に顯著な研磨痕があり、図上方は底面を切って敲打痕を認める。底面の断面は緩く窪む。

以上の出土遺物のうち、1387 の細頸壺は突帯部分の屈曲が顯著で中期後半～新相、1392 の高杯脚部は下方拡張と内湾する裾部形状から備後地城に共通する後期前半古相に属す。1392 は SP5299 の柱抜取り痕で出土しており当該建物の廃絶時期を示す。一方 1387 は SP5833 の掘方より出土しており、当該建物の構築時期の上限を示す。

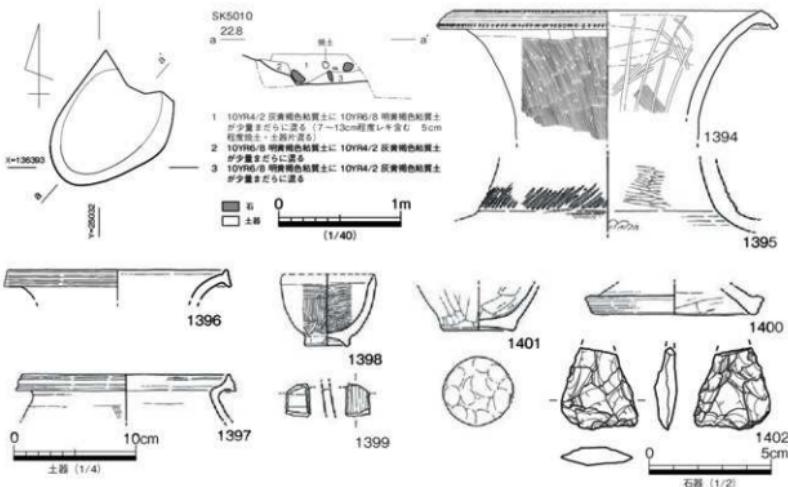
3) 土坑

SK5010 (172 図)

調査区東側で検出した土坑である。SH5003B あるいは SH5003C・D の床面精査後に確認したので、それら竪穴建物に先行するものと考えられる。平面形は梢円形を呈す。長さ 1.6 m、幅 1.3 m、深さ 0.36 m で断面形は逆台形を呈し底面は平坦である。図の 2・3 層は初期に埋没した明黄褐色の基盤土類似の流入土である。1 層は 10cm 前後のレキや焼土や土器片を含む基盤土ブロック混じりの埋戻し土である。断面形状や堆積土から竪穴建物に付属する中央土坑の可能性もあるが、調査区内では関連する柱穴を認識することができなかった。埋土中より比較的多くの弥生土器片が出土した。



171図 5区 SB5007 平断面図・出土遺物実測図



172 図 5 区 SK5010 平断面図・出土遺物実測図

1394～1396は壺である。1394は大きく開く口縁部の上端を外に折り曲げ、凹線文及び上下端に刻目を施すものである。1395は頸胴部境に長い斜行刻目を巡らせるもので、文様帶下端に段をもつ。1396は口縁部を上下に拡張し凹線文を施す。1397は口縁部拡張の壺で胴部境の内面は稜線を形成しない。内面は残存範囲にはヘラケズリが及んでいない。1398は上げ底の小形鉢である。厚手だが内外面をヘラミガキで丁寧に仕上げている。1399は脚柱に矩形透孔をもつ高杯である。1400は裾端部拡張で凹線文を施す高杯、1401は器種が明確でないが上げ底の底部で内面に顕著なヘラケズリを施す。1402はサヌカイト製打製石器である。粗加工段階で折損したものである。

以上の出土遺物は提示したすべての土器が後期前半に属し、1395の壺頸部文様や1397の壺の内面調整、1398・1401の上げ底形態、1400の脚端部形態などから、後期前半古相に特徴的な属性を備えており、当該土坑の埋没時期を示している。

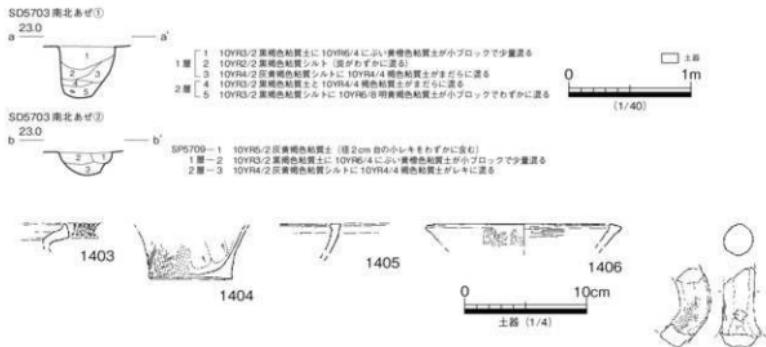
4) 溝

SD5703 (173図)

調査区中央南寄りで検出した溝である。長さ2.2m、幅0.5m、深さ0.42mで底面は中央部に最深部があり、両側が段を有して浅くなる。埋土上層(1層)は暗褐色土、下層(2～5層)は基盤土の小ブロックを多く含む埋戻し土である。周辺のすべての遺構に先行する。

遺物はすべて弥生時代中期の土器で、主に埋土下部で出土している。

1403は壺口縁部である。口縁端部を拡張し、縱方向の刻目を密に施す。1404は薄手の壺底部である。内面にヘラケズリを施す。1405・1406は口縁部を内外面に拡張し端面にナデを施す鉢である。凹線文出現前の調整手法をとどめる。1407は把手片である。コップ状鉢などに貼付される形態である。



173 図 5 区 SD5703 断面図・出土遺物実測図

これらの出土土器は1403・1404が上層～下層、1405～1407が下層で出土している。1404の壺がやや新しい様相をもつが、それ以外の土器は四線文出現前の中期前半新相に位置づけられる。したがって、当該溝は中期前半新相に機能し、廃絶したものと考えられる。

5) 不明遺構

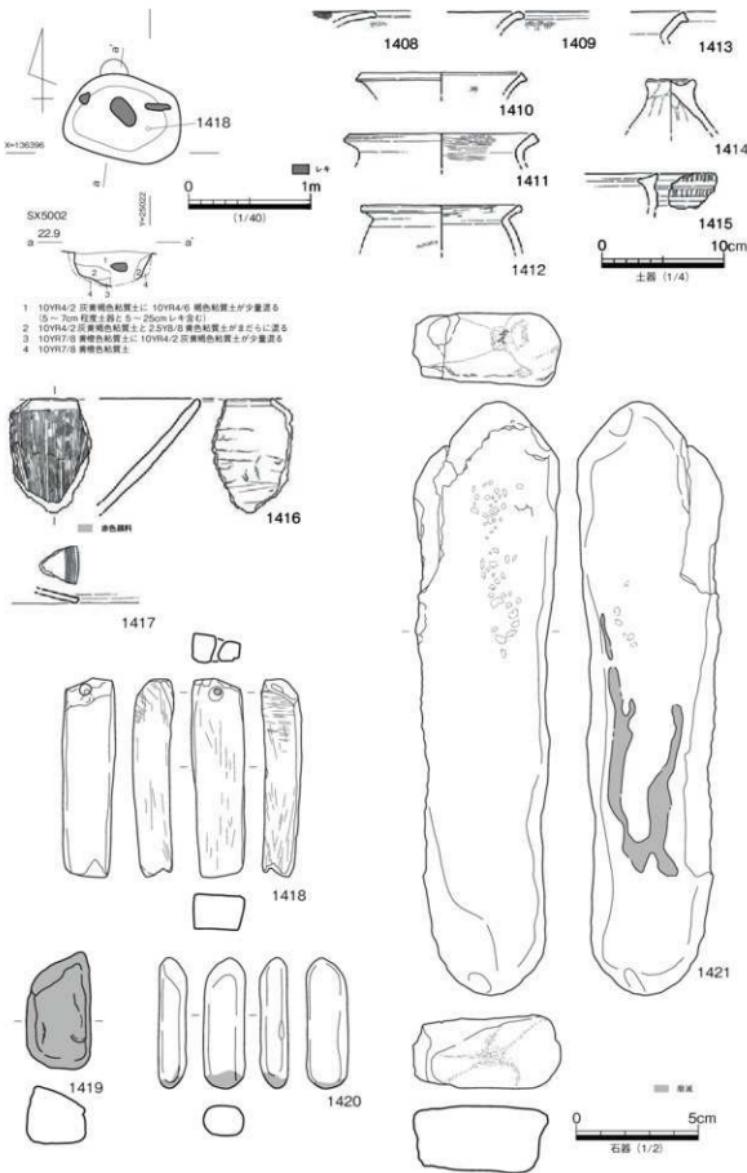
SX5002 (174・175図)

調査区中央付近で検出した土坑状の不明遺構である。堅穴建物の中央土坑に類似する。周辺には主柱穴に相当する柱穴が多いが、建物柱穴としての組み合わせは抽出できなかった。掘方は長さ0.96m、幅0.7mで不整長方形を呈す。深さは0.3mで断面は「U」字形をなす。埋土下層(図の2・3層)は基盤土に類似するか、ブロック状に基盤土を含む土が堆積し、上層(図の1層)には褐色土ブロックや土器・石器・レキの投棄が認められた。上層掘削の際土壤中に微細な赤色粒の含有が認められたが、塊となる部分がないため、取り上げできていない。また、投棄されたレキには被熱したものがあった(1419・1420)。

出土遺物には弥生土器、石器・鉄器・レキがある。これらはすべて上層に投棄されたものである。

1408・1409は外反する口縁部の破片で器種は壺としたが、高杯や鉢の可能性もある。内外面をヘラミガキで調整する。1410～1413は壺である。端面部取りし、内面の胴部境は「く」の字に屈曲するが棱線は緩い。1411・1412の内面はヘラケズリが及んでいない。1414は壺蓋で天井部外面中央が瘤状に突出する。1415は中期後半古相の鉢口縁部である。1416は口縁部が斜め上方に直線的に開く形態の鉢である。内面はハケ目調整後ヘラミガキを暗文風に施す。主に内面に赤色顔料が付着しており、分析の結果「水銀朱」と判明した。朱精製容器と考えられる。内面の上端付近まで付着が及ぶ。1417は高杯脚部である。外側の裾端部に接する箇所に櫛描き直線文(5条1単位)1条を施文する。

1418は流紋岩製の砥石である。長さ8.1cmの手持砥で、上端に円孔を穿ち垂下できるようにしている。小口を除き、ほぼ全面が平滑な砥面をなす。下端は敲打により筋状に欠損する。1419は全面が被熱し赤化した砂岩自然石である。表面には滑りが生じている。1420は全面が被熱し赤化した棒状の安山岩磨石である。原因はわからないが、下端部のみ黒化し、その部分がよく磨れている。1421は安山岩製



174図 5区 SX5002 平断面図・出土遺物実測図 (1)

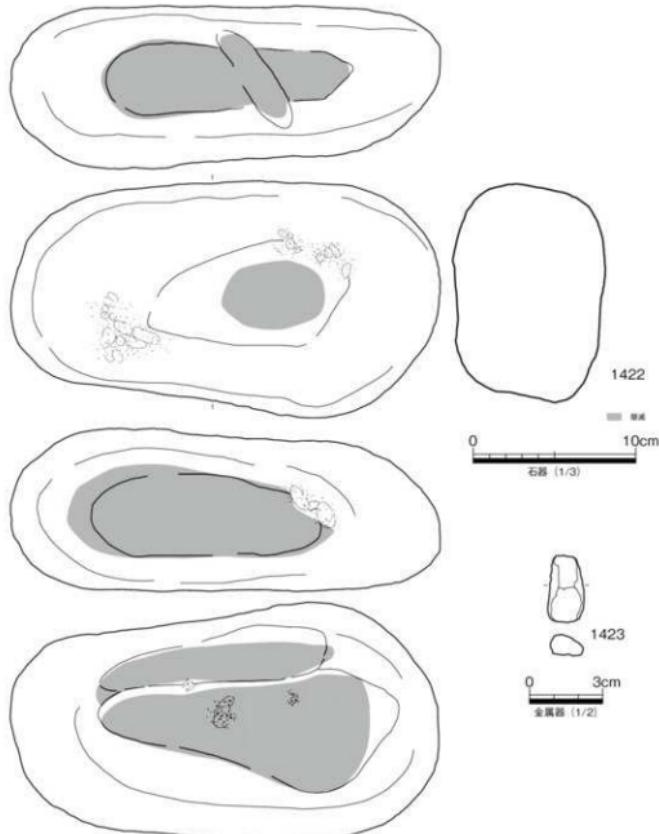
の棒状砥石である。図の正面、とくに下半が砥面となる。1422は大形の砂岩製砥石である。表裏面に縦長で強く窪む砥面が複数面ある。磨製石斧用の砥石の可能性が高い。

1423は塊状鉄片である。

以上、SX5002出土の土器は甕口縁の端部拡張が矮小化するが面取りを丁寧に行い、ヘラケズリが内面上半まで及んでいないことから、後期前半中相から新相にかけての時期にまとまる。また既存の調査で朱精製容器が後期前半に多いことも矛盾せず、出土土器の所属時期が当該遺構の埋没時期と認定しうる。

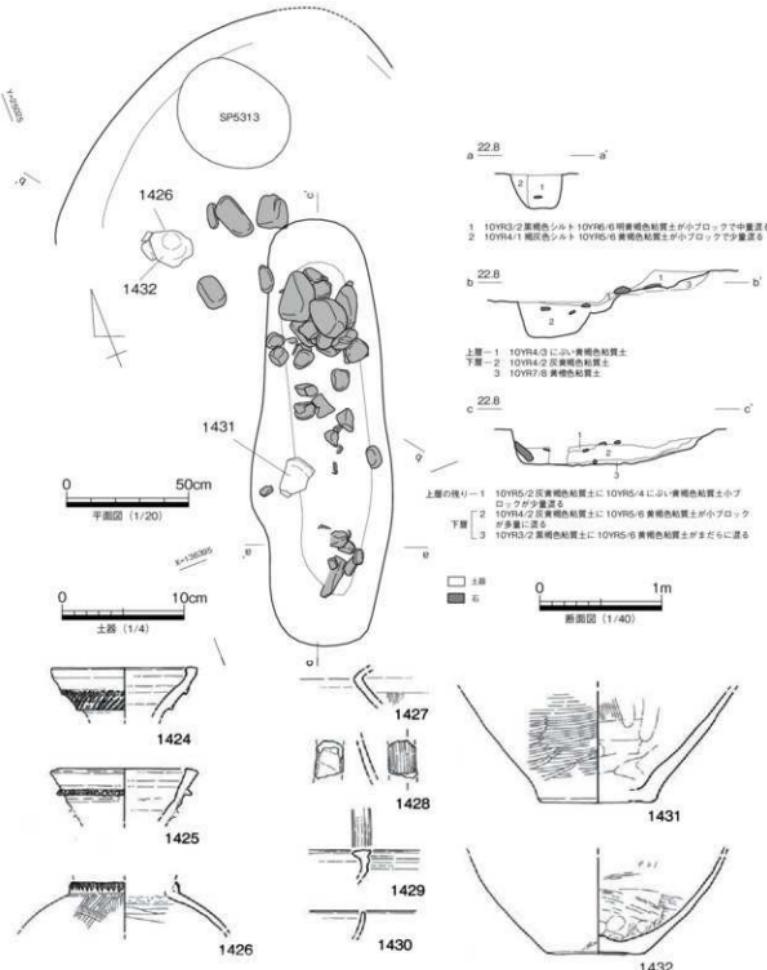
SX5005 (176・177図)

調査区中央やや東寄りで検出した遺構である。SH5003A・B・CD調査後に平面形を確認した。掘り込みが二重となり上段の掘り込みは北側1mほどの範囲のみ残存する。底面は下方に緩やかに傾斜し下



175図 5区 SX5002出土遺物実測図 (2)

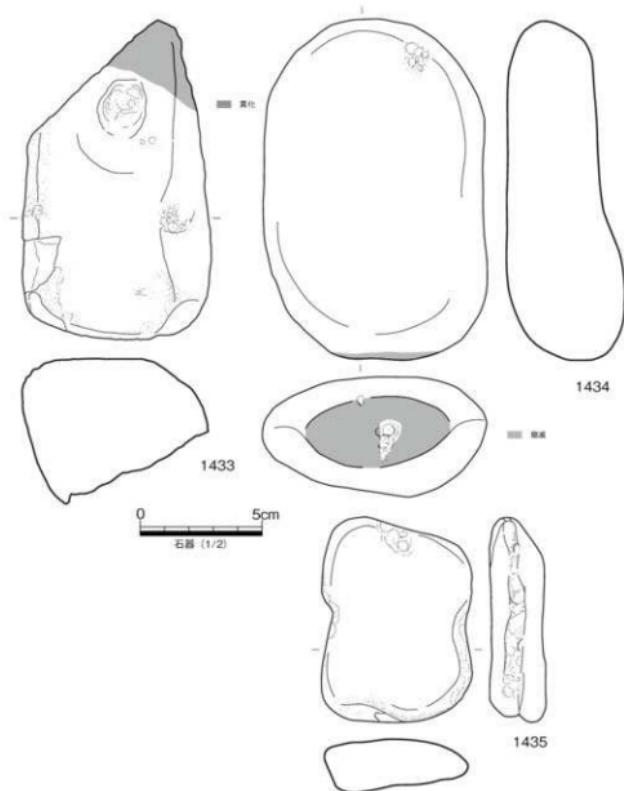
段部に至る。下段部は長さ 1.75 m、幅 0.5 m、深さ 0.15 m で横断面は逆台形を呈す。縦断面は南が垂直近く立ち上がるが、北は緩やかに立ち上がり上段にスムーズに接続する。埋土は最下層（3 層）に厚さ 3cm の薄い黒褐色層が堆積し、その上部に基盤土の小ブロックを多く含む下層（2 層）、灰褐色系土に基盤土小ブロックが混じる上層（1 層）の順で堆積する。上層には 10 ~ 20cm の大小のレキが投棄される。調査時には墓の可能性を検討したが、下段部北側の掘方が緩い傾斜であることから否定される。なお、調査時には掘立柱建物 SB5002 の柱穴 SP5313 の検出ができていなかったが、当該遺構検出時の



176 図 5 区 SX5005 平断面図・出土遺物実測図 (1)

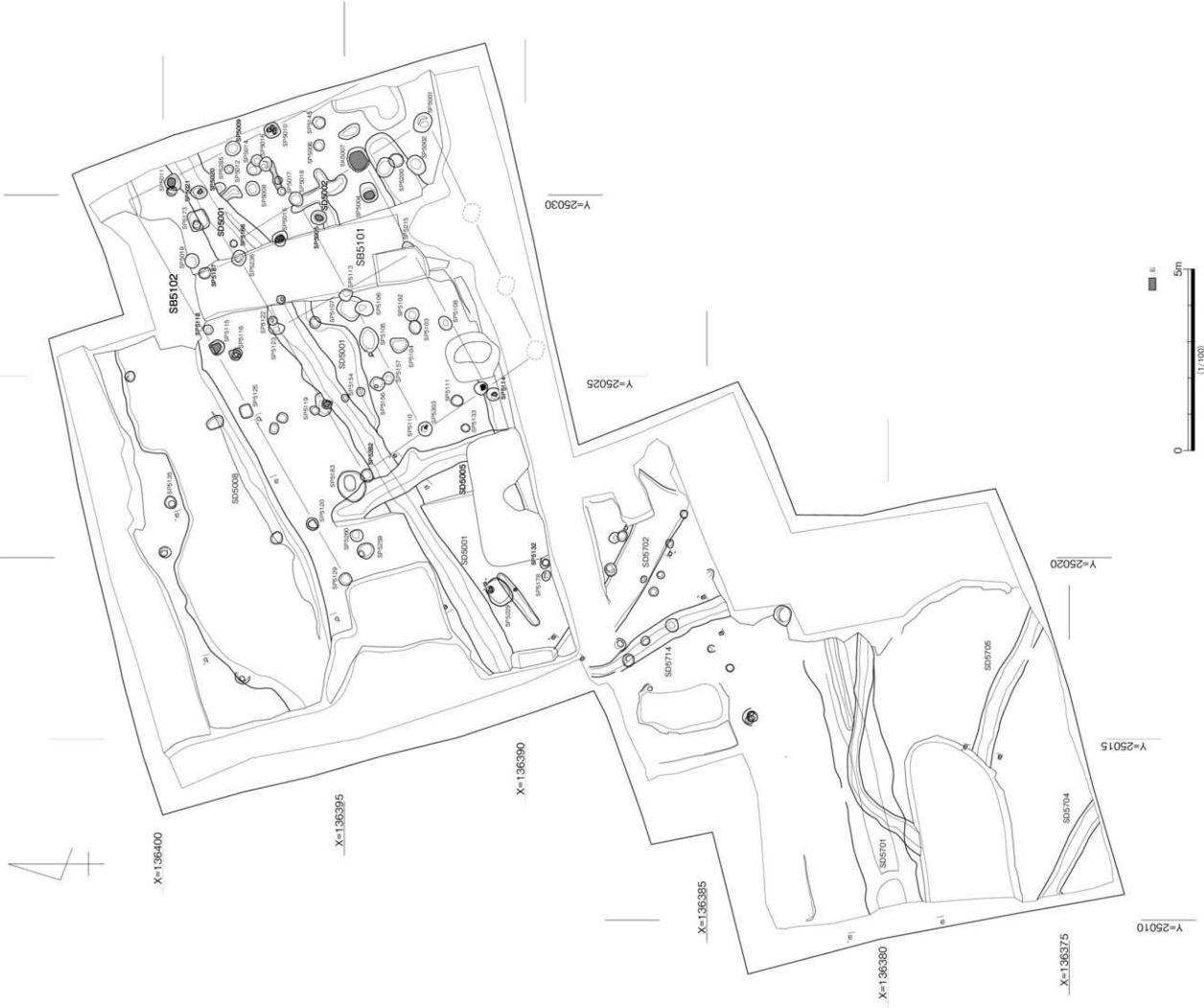
写真からSP5313が当該遺構を切っていることが判明する。

出土遺物の多くが上層または下層上面で出土した。弥生土器・石器がある。1424～1426は壺である。1424・1425は細頸壺口縁部片で外面に2条の刻目突帯を貼付する。1425は2条目の突帯が剥離する。いずれも突帯付近で器形が変化するが、強い段は形成しない。1426は頸胴部境に押捺突帯を貼付する壺である。1427は口縁部が「く」の字に屈曲する壺、1428は脚部に方形透孔をもつ高杯もしくは台付鉢脚部である。1429は口縁部を拡張し外面及び上端面に凹線文を施す高杯もしくは鉢である。1430はボウル状の鉢口縁部である。SP5313検出前に出土した土器であり、混在の可能性もある。1431・1432は平底もしくは上げ底の壺底部である。1431は外面も横向方向に丁寧なヘラミガキを施す。1433は砂岩の焼レキである。破断面及び網掛部が被熱により黒化する。器面の一部に熱破碎した剥離痕がみられる。1434は砂岩製の石杵である。図の正面が被熱で赤化する。図の下端部（小口部）のみ頸著な研磨痕があり、平滑な面を形成する。1435は両側縁に抉りをもつ砂岩製レキ石錘である。表面が被熱により赤黒く変色する。重量は165.2gである。



177図 5区SX5005出土遺物実測図(2)

178 図 5区第1遺構面全体図



b. 古墳時代後期以後

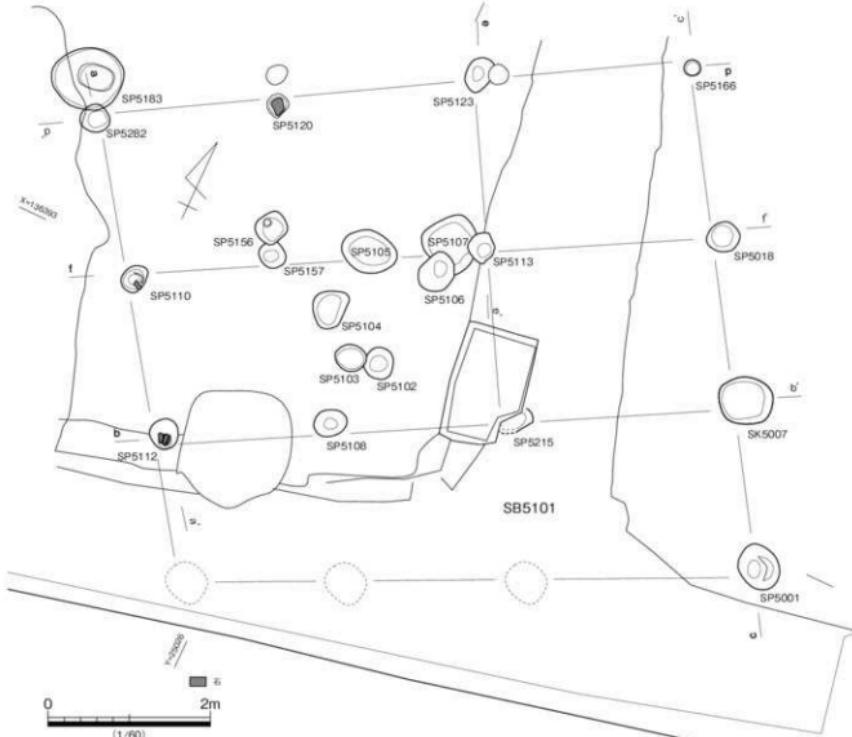
1) 掘立柱建物

SB5101 (179・180 図)

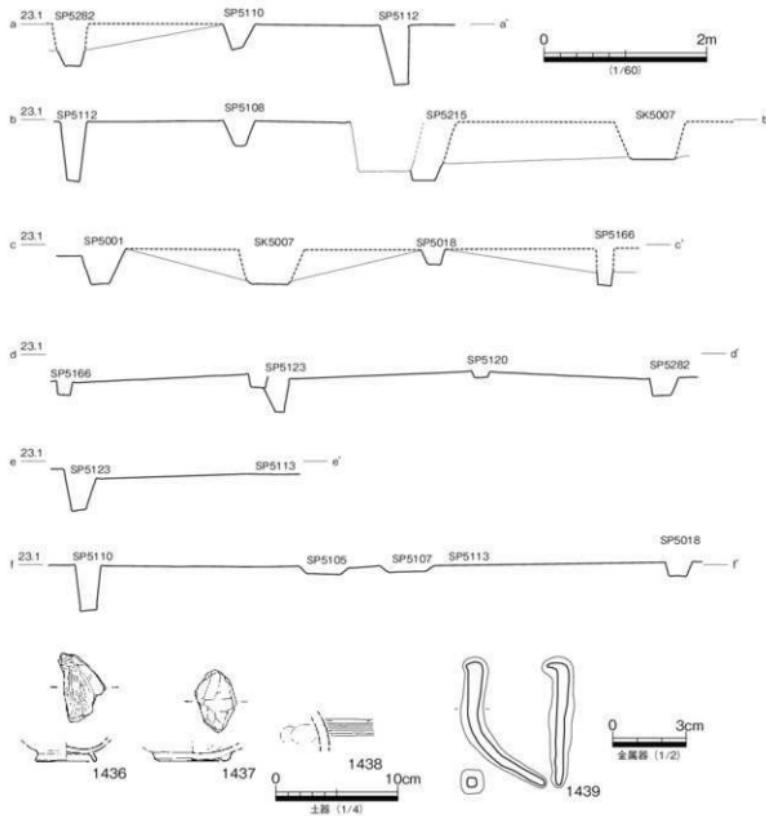
調査区東寄りの古代以前の包含層上面で、東西方向の溝 SD5001 調査後に検出した掘立柱建物である。梁間 3 間 (6.1 m) × 衍行 3 間 (7.3 m) で主軸方位は北から 65 度東に偏る。南辺の側柱 3 基が後世の攪乱により滅失する。残存する柱穴は最大で直径 0.53m、検出面からの深さは 0.7m である。梁衍の角度が 85 度で平面は平行四辺形を呈す。側柱はいずれも深いが、間柱は検出面からの深さが 0.1 ~ 0.3 m と浅い。埋土は淡灰色砂質土で褐色土の小ブロックを多く含む。

1436・1437 は西辺側柱 SP5112 出土の土器である。1436 は薄手で高台下端が外に張りだす形態の土師器椀で色調は灰色系で瓦質に近い硬質焼成に仕上げる。1437 は淡灰色を呈す須恵器椀で、貼付高台は低く断面台形。13 世紀前半の十瓶山系須恵器椀であろう。1438 はヘラ描沈線文 4 条を施す弥生時代前期の壺胴部片で混在品である。1439 は間柱 SP5105 出土の鉄釘である。長さ 6.5cm で頭部は折り曲げにより成形する。

出土遺物から当該建物は 13 世紀前半ごろに廃絶したものと考える。



179 図 5 区 SB5101 平断面図

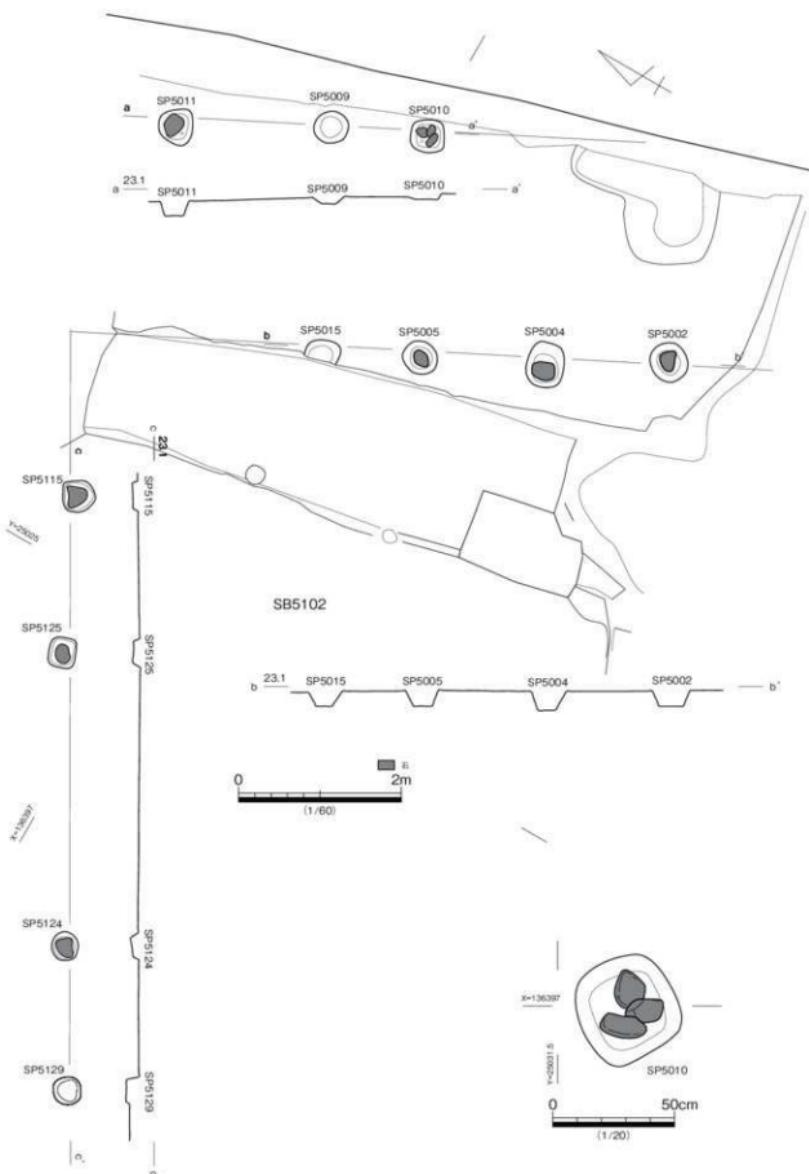


180図 5区 SB5101 出土遺物実測図

SB5102 (181図)

調査区東寄りの古代以前の包含層上面で検出した掘立柱建物である。攪乱を除くすべての遺構に後出する。柱穴底面に砂岩の扁平レキを置き根石とする。東西方向に1列、南北方向に2列の柱穴列が組み合い、直角に屈曲する長廊建物が想定される。残存長は東西12m、南北7.4mである。主軸方位は北から28度西に偏る。このうち柱穴SP5010は根石に15~20cm大の楕円レキ3個を組み合わせて根石としていた。

出土遺物は小片のため図化していないが、古記録から大正から昭和にかけての旧陸軍に関連する建物と考えられる。



181 図 5区 SB5102 平断面図

2) 溝

SD5001 (182・183図)

調査区北寄りで検出した東西方向の溝である。幅3m以上の範囲に深さ0.16mの浅い落ち込みが広がり、その中央やや南寄りに幅0.9m、深さ0.2mで断面「U」字形の最深部がある。走行方向は東西ではなく南北方向に合致する。また北側1.3mにはSD5008が同じ方向で並走する。

埋土は浅い落ち込み部分の上層(1・2層)に灰黄褐色系砂質土が堆積し、最深部の下層(3～5層)には褐色系シルト層が堆積する。後述するSD5008とは連続する断面を記録していないので明確ではないが、埋土の記録からは当該上層がSD5008に対応するようである。

出土遺物は上層と下層に区分して取り上げた。

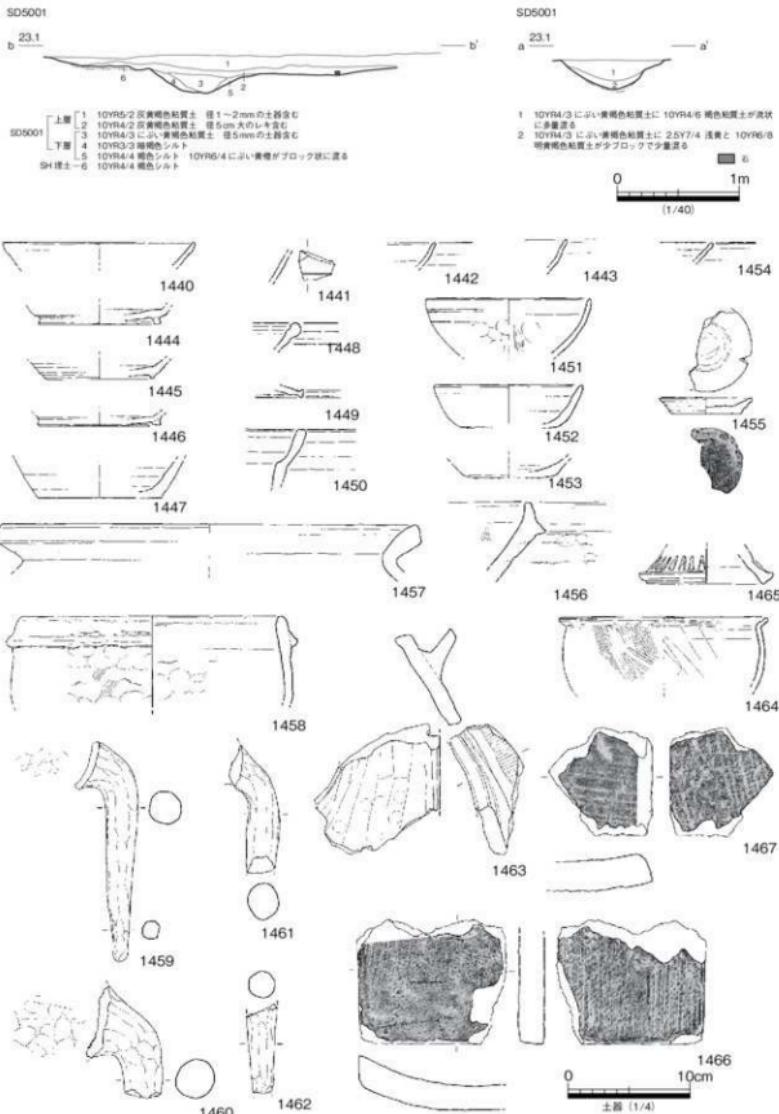
1440・1441は龍泉窯系の青磁碗である。1442・1443は和泉型瓦器椀の口縁部片で、口縁部下の強いナデによる段が明確である。1444～1446は須恵器杯高台部片、1447は十瓶山系須恵器壺の底部片である。1448は口縁部が玉縁状に肥厚する須恵器鉢である。1449は須恵器高杯脚端部片、1450は瓦質焼成の土師器鍋、1451は土師器椀、1452～1454は土師器杯、1455は土師器小皿で底面はヘラ切り後のナデ調整、内面は回転ナデにより強い稜線が生成される。

1456は赤褐色で焼き締まる備前系陶器鉢、1457は土師器甕口縁部片である。1458は土師器足釜で口縁部が直線的に内傾し端部から下がった位置に細い突帯を貼付する。1459～1462は足釜の脚部片である。1459の脚端は細く窄まる。1463は土師器甕の部材片である。1464・1465は混在の弥生土器である。1466～1476は平瓦片で、1466は凸面に継位縄目タタキ、凹面がやや粗織の布目、1467は凸面に糸切り痕を切ってやや斜位の縄目タタキが、凹面には糸切り痕をとどめる。1468・1469は凸面に粗い継位縄目タタキ、31は凸面に細かな縄目タタキを施す。1472～1474は凹凸面をナデ仕上げ、1475は凸面をナデ、凹面に細かな布目をとどめる。1476は凸面に糸切り痕を切って布目が観察できる。凹面は丁寧なナデ調整で山形断面の側縁は一面に顯著なヘラケズリが残る。

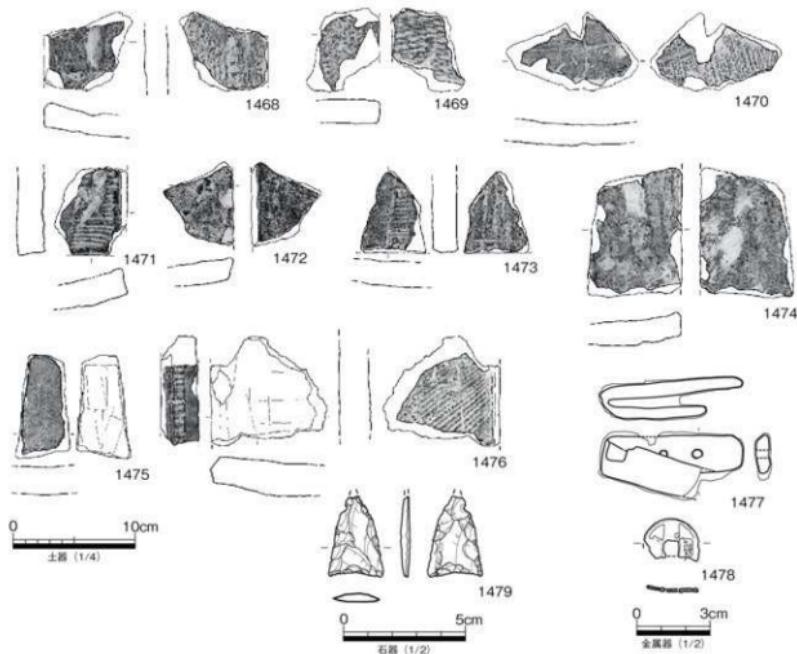
1477は長さ10cm、幅2.5cm、厚さ5.5cmの鉄刀の柄部である。下端から1.8cm及び3.2cmの2箇所に目釘孔を穿つ。下端から5.8cmで強く「V」字形に折曲がる。目釘位置から破断位置まで幅に変化がないので残存部はすべて茎と推定する。目釘位置から茎尻までは一方の幅が狭まり、対辺と非対称をなす。よって図の下を刀背部とみる。茎の長さが10cm以上、刃縁に接続する側の茎縁に反りがあることからみて、全形は長さ60cm以上の太刀となる可能性がある。1478は銅錢である。銘が不明瞭だが、形状から開元通宝もしくは熙寧元寶と推定される。1479はサヌカイト製打製石鐵である。

出土遺物のうち1442・1443の瓦器椀は口縁部形態から13世紀後半、1447・1448は13世紀ごろ、上層出土の1450・1456は15世紀ごろに所属する。平瓦は10～13世紀のものが多いが、1476は凸面布目の特徴から7世紀後半から8世紀前半のものである。1443の瓦器は下層で出土している。

以上のことから、当該溝は13世紀までには掘削され、下層が埋没した後再掘削され、15世紀に廃絶したものと考えられる。1477の鉄刀は意図的な折り曲げ行為が想定され、中世の経塚などで出土する埋納品によく似ている。



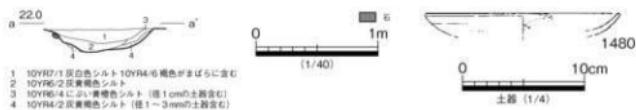
182図 5区 SD5001断面図・出土遺物実測図(1)



183図 5区 SD5001 出土遺物実測図（2）

SD5005 (184図)

調査区中央付近で南北方向に走行する溝である。幅0.9m、深さ0.2mで断面形状は「U」字形を呈す。埋土は灰色土と褐色土さらに黄色土のブロック層で、締まりのない砂質土である。1480の肥前系の染付皿が1点出土しており、近世後半の溝と考えられる。



184図 5区 SD5005 断面図・出土遺物実測図

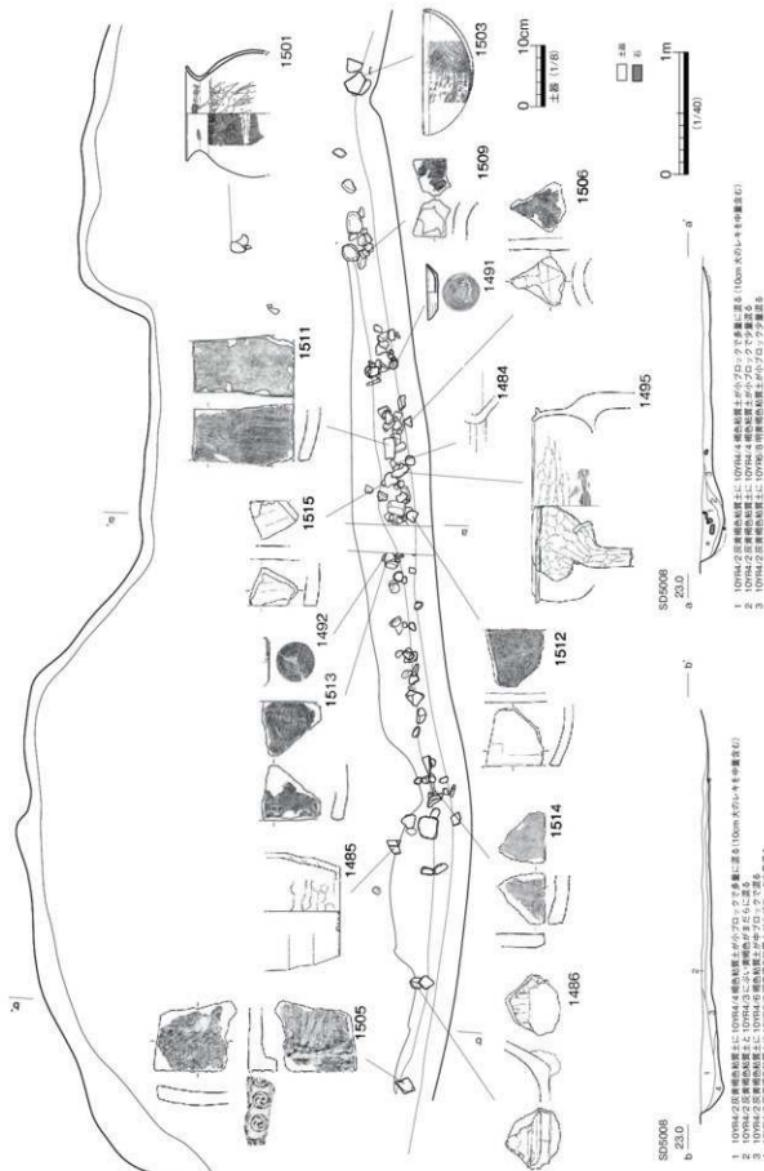
SD5008 (185 ~ 187 図)

調査区北側を東西方向に走行する溝である。幅は上端最大幅が3.7mで、南端に深さ0.2mの最深部がある。北側は最大幅2.6mのテラスをなし、テラス部分の深さは0.1mである。走行方向は南に位置する溝 SD5001 とほぼ並走するが、東に向かって溝間が若干狭まる傾向にある。なお、東に約50m離れた1区で確認したSD1601a~cのいずれかに接続するものと考えられる。

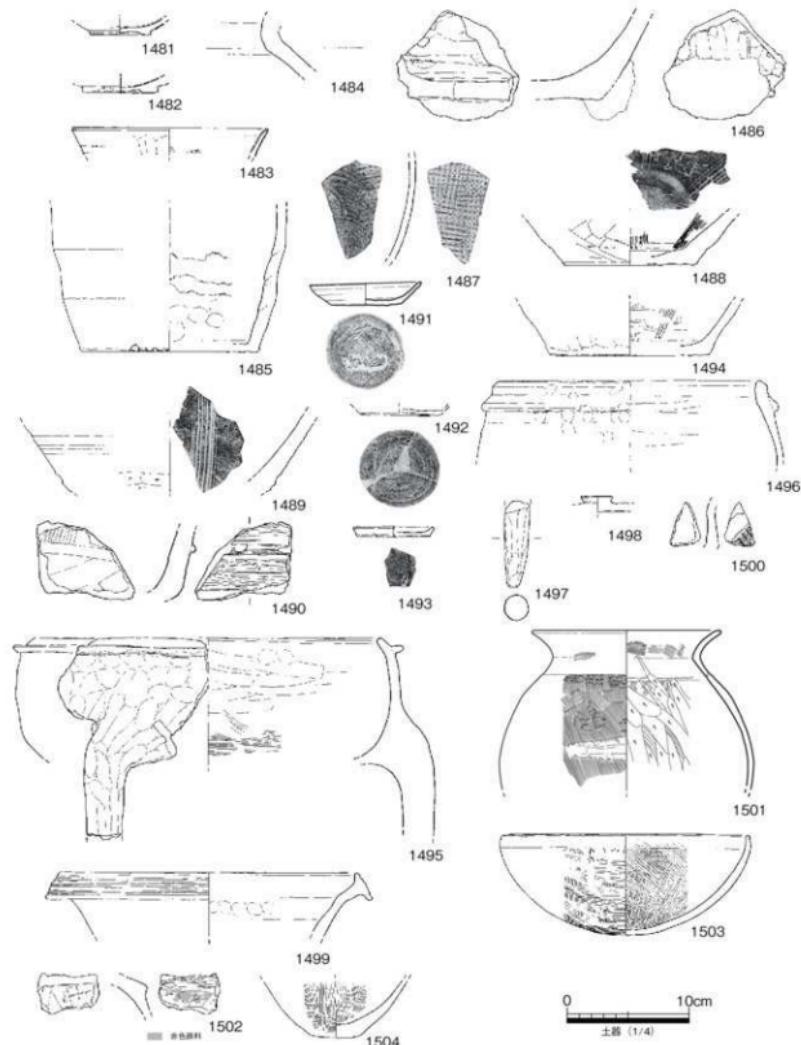
埋土は上下層に大別される。灰褐色系土に褐色ブロックが混在する上層(1層)は SD5001 の上層から連続して堆積したものである。SD5001 と同じく下層埋没後に再掘削され、その後上層が堆積したものである。南端最深部からは図に示したように多数の遺物が出土したが、断面からみて上層部分が窪んでいることからこれらの遺物は、再掘削後に投棄された一群と考えられる。

図化した出土遺物はすべて上層出土である。1481・1482は白磁碗の高台部片である。1481は削り出し高台で断面は台形を呈し高台部は露胎する。施釉はやや緑味を帯びる色調。1482は蛇の目高台で高台内面まで施釉が及ぶ。釉は白味が強い色調で、古代10世紀ごろの舶載品であろう。1483は青磁碗口縁部片である。口縁部下外面に蓮弁上端の浅い段が細かなピッチで施される。明確な箇は認められない。釉は緑味の強い鶯色を呈す。1484・1485は備前系陶器である。1484は壺の頸部片で胴部外面に白色の胡麻が広がる。1485は壺底部片である。底面の器壁が薄く底部から5cmほど上の器面調整に乱れがみられる。1486は常滑系陶器壺底部片である。外面に炉壁ブロックが釉着し底面が正置しない。胎土には白粒が多く、外面から2mmほどの内部に黒色層が薄く介在する。色調は黄味のある明褐色を呈す。1487は外面に格子目タタキを施す亀山系陶器壺である。1488・1489は陶器擂鉢。1490は瓦賀の火鉢底部片である。外面に横方向の丁寧なヘラミガキが回転手法を用い施されており、瓦器盤の技術系譜上にあるものである。底面屈曲の形態から14世紀後半から15世紀にかけてのものであろう。1491は土師器小皿である。ヘラ切り後に体部下縁に強いナデを施すことから14世紀後半ごろの所産である。1492は土師器小皿底部片である。ヘラ切り後のナデ調整が顕著である。1493は土師器小皿でヘラ切り後の底面調整と体部の強いナデがみられる。1494は土師器擂鉢である。1495~1497は土師器足釜である。15は内傾する口縁部の端部近くに細い突帯を貼付し、脚付け根は体部下端付近に下がる。14世紀後半以降の形態である。1498は古代の須恵器杯蓋片、1499~1503は弥生土器である。このうち1502の裝飾高杯脚部片は外面に赤色顔料を塗布している。

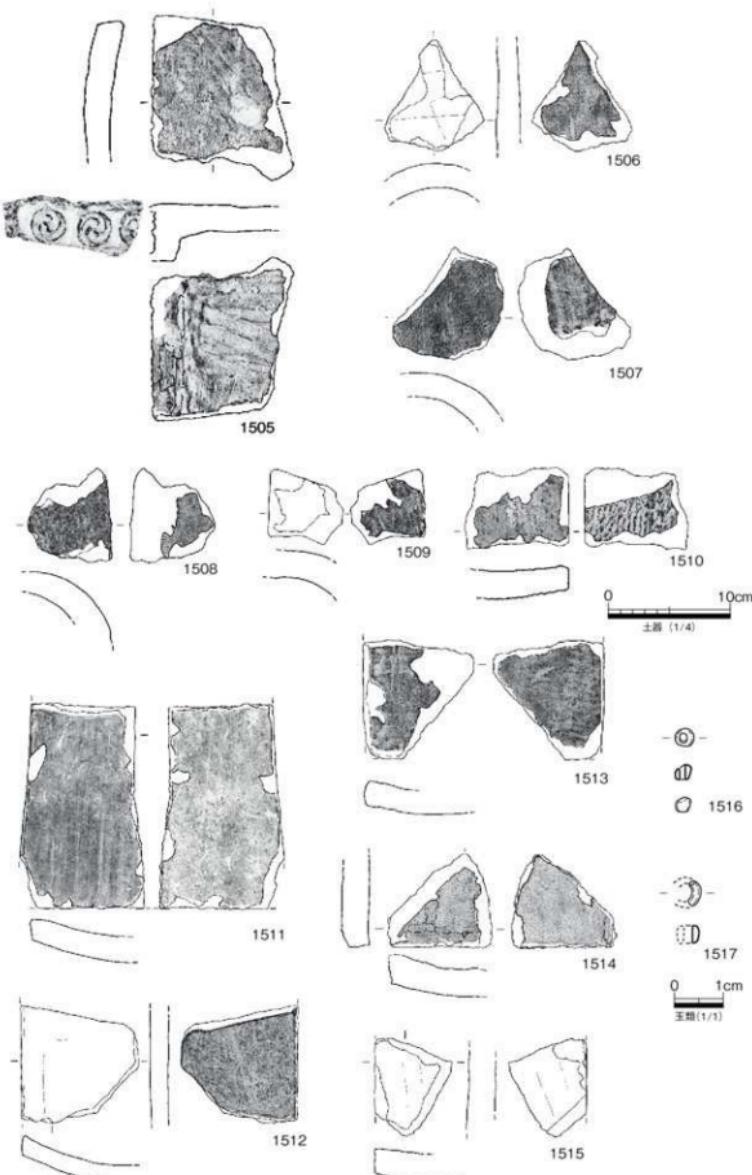
1505~1515は瓦である。1505は連巴文軒平瓦である。巴文は三巴で輪郭圈線をもち文様線は細手で高さは2mmを最大とする。尾部は圈線に接する。文様径は32mmで間隔は5mmと2mmである。左から2つ目の巴の下方及び右方の尾部付近に微細な範傷を認める。瓦当は粘土を平瓦部に貼り付け、凸面側の強いナデにより接合部を調整する。ただ、接合痕は明瞭に残る。凹面は布目を斜め方向のナデにより消しているが、瓦当から3cmの範囲はナデが及ばず布目が残る。側縁はヘラキズリを施し、平坦に仕上げる。焼成は灰色の瓦賀焼成で胎土中に白色砂粒が多く残る。文様や瓦当取り付け方法は、12世紀後半から13世紀にかけての中央官衙系の技法に共通する。1506~1509は丸瓦片である。凹面に布目が残り凸面はナデ調整により平滑に仕上げる。1510~1515は平瓦片である。1510は凸面に粗めで継位の繩目タタキを施し、凹面は粗いナデ調整。1511・1512は凸面に離れ砂付着で下端付近のみナデ調整し大部分が未調整、凸面及び側縁は丁寧にナデを施す。1513は凸面に離れ砂が付着し一部を削り調整、凹面は糸切り痕を残す。側縁は低い山形で棱線が残る。1514・1515は内外面に離れ砂をとどめる瓦で、1514は下端内縁を斜めに削り落とす。



1185図 5区 SD5008 平断面図及び遺物出土状況図



186図 5区 SD5008 出土遺物実測図 (1)



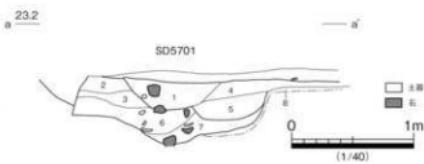
187図 5区 SD5008 出土遺物実測図 (2)

1516・1517はガラス製の玉である。1516は弥生時代に通有の色調・形態だが、1517は透明感のあるグリーンの器体表面が白く風化した鉛ガラス製品である。第3章6節に鉛胴体分析の結果を掲載した。

以上の出土遺物は時期幅があるが、14世紀後半から15世紀に所属するものが一定量存在しており、当該溝及びSD5001上層の埋没時期が15世紀ごろであったことを示す。一方で、SD5001を含めて考えると、両溝の掘削はSD5001の下層遺物が示す13世紀ごろを下限とするものと考える。瓦が多く出土する点は、付近に瓦葺建物が存在したことと示すものであろう。

SD5701 (188 ~ 191図)

調査区南側で検出した東西方向に走行する溝である。幅1.9m、深さ0.5m、断面形は「U」字形を呈する。埋土は最上層、上層、下層に区分した。ただ西壁断面では数回の掘り直しが確認できる。最上層としたのは1~4層で1層は最終段階としたのは1~4層で1層は最終段階



- 1 10YR4/2 黄褐色粘土質土にレキ (1~13cm程度) 土器 (1~3cm程度) 多量に含む
2 10YR4/2 黄褐色粘土質土にレキ (1~3cm程度) 土器 (1~3cm程度) 多量に含む
3 10YR4/2 黄褐色粘土質土にレキ (1~3cm程度) 土器 (1~3cm程度) 多量に含む
4 10YR4/2 黄褐色粘土質土に10YR5-2 黄褐色粘土質土がまじるる 土器 (2~3cm程度) 多量に含む
5 10YR4/2 黄褐色粘土質土にレキ (1~7cm程度) 多量に含む
6 10YR4/2 黄褐色粘土質土にレキ (5mm~7cm程度) 多量に含む レキ (1~5cm程度) 中量含む
7 10YR4/2 黄褐色粘土質土に10YR5-2 黄褐色粘土質土がまじるる 土器 (2~3cm程度) 多量に含む
基盤層-8 10YR6/2 黄褐色粘土質土に10YR4/2 黄褐色粘土質土が少量含む

掘り直し部である。2~4層は当該溝周辺に広がる褐色系の古代形成の包含層に接続

188図 5区 SD5701断面図

する堆積層である。上層としたのは5~7層でそのうち5層は掘り直しの痕跡である。また、西壁断面に示されていないが7層完掘後に下層を検出した。下層は当該溝東では7層下で検出できるが、西側では溝の掘方を南に逸脱し、別の溝としての軌跡をたどり、後世の攪乱で大部分を滅失する。西壁部分では下層の断面をとらえることはできなかった。これは当該SD5701の断面でみると数回の掘り直しが行われており、下層から上層に至る過程も埋没後の掘り直しによって形成されたであろうことが推察できる。下層から牛馬と考えられる歯牙片が出土している。

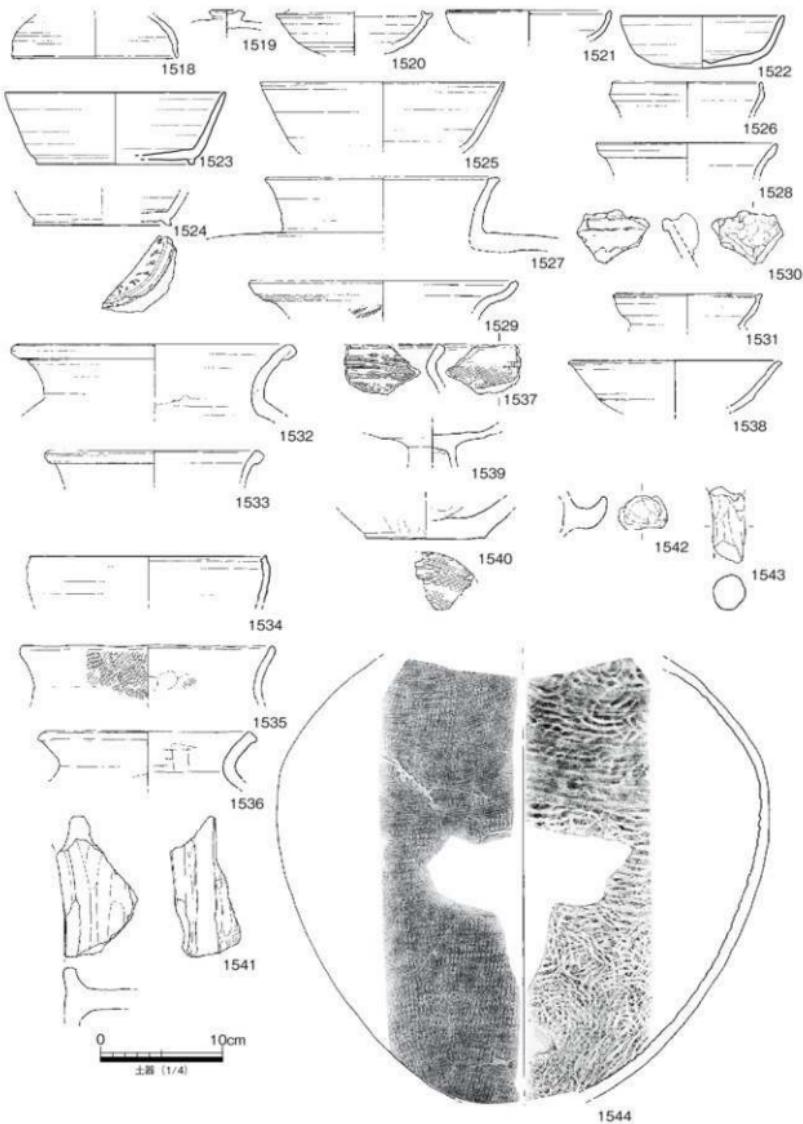
出土遺物が多くコンテナ8箱に及ぶ。ただ、出土遺物の多くは混在の弥生土器である。ここでは、溝機能時と推定される土器類を先に報告し、その後弥生土器等を報告することとする。

1518~1534・1544は須恵器である。1518~1522は7世紀代の蓋と杯、1523~1525は8・9世紀代の杯である。1526は7世紀代の口縁部が屈曲する形態の杯身であろう。1527~1530は壺である。1529は口縁部が上方折れ曲がる形態である。1530は壺口縁だが焼成時の炉壁釉着や変形が著しい。1531~1533は甕である。1531は土師器甕に類似する口縁形態をもつ。1532~1533は口縁部が玉縁状に肥厚する。1534は鉢である。外面に強い回転ナデを施し、器面に凹凸がある。1544は胴部径42cm、残存高36cmの須恵器甕胴部片である。

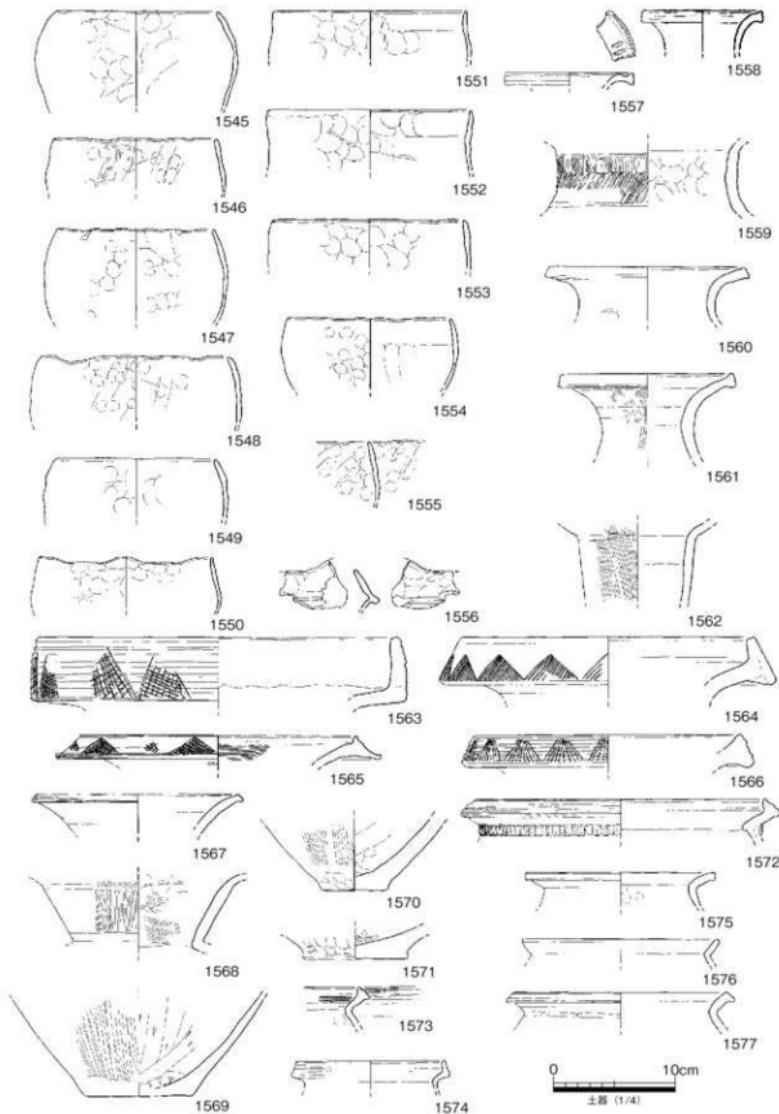
1535~1543は土師器である。1535は口縁部の屈曲が弛緩し外面縦方向のハケ目調整を行う。1537は口縁部が緩やかに反転して外反し内外面をハケ目調整する。1538は古墳時代の高杯、1539は形態から7~8世紀の高杯脚部である。1541は移動式甕片、1542は甕把手、1543は足釜脚部片である。このうち1539は下層出土、1541は最上層出土である。

1545~1556は製塙土器である。薄い土師質焼成で口径13~15cmで胴部が内湾しながら口縁部に至る形態が多い。内外面は指押さえで調整する。そのうち1556は下層出土で、口縁部が強く屈曲して内傾する形態であり特異である。

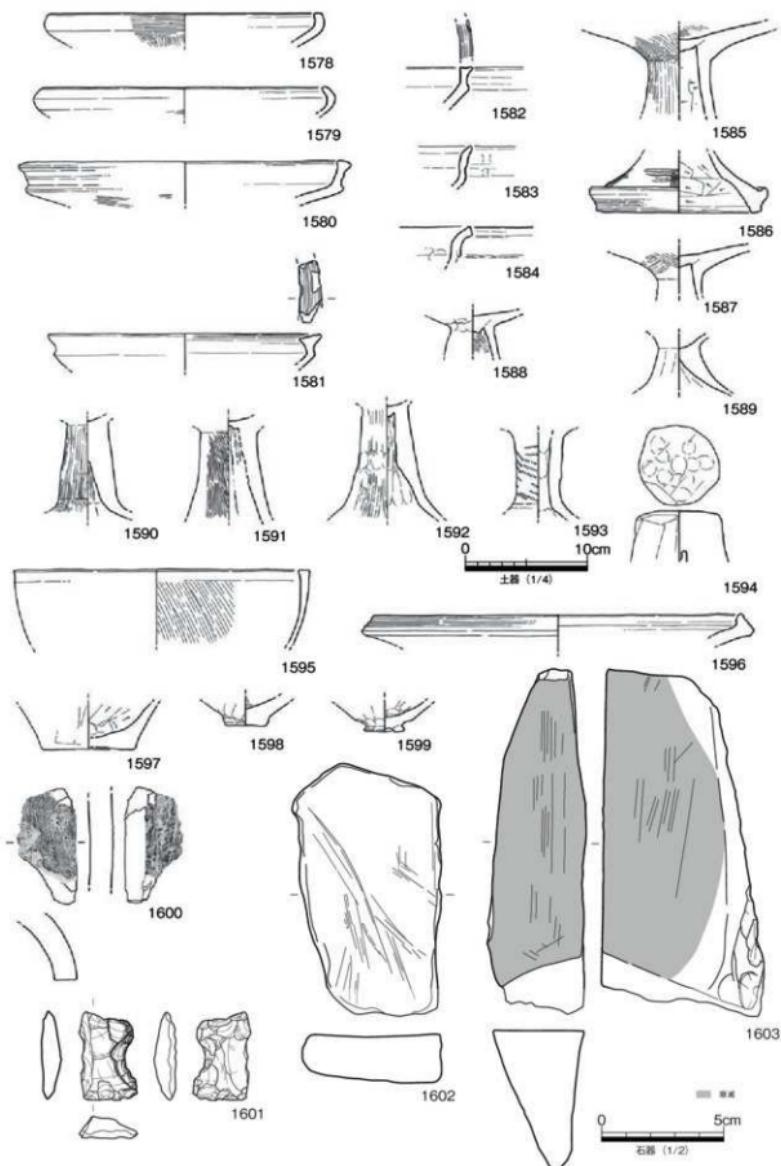
1557~1599は混在の弥生土器である。1557~1571が壺である。中期から終末期のものを含む。



189図 5区 SD5701 出土遺物実測図 (1)



190図 5区 SD5701 出土遺物実測図 (2)



191図 5区 SD5701 出土遺物実測図（3）

1572～1577が甕で、同じ時期幅をもつ。1578～1593が高杯である。1594は中空の支脚、1595は直口の鉢、1596は器台口縁部である。

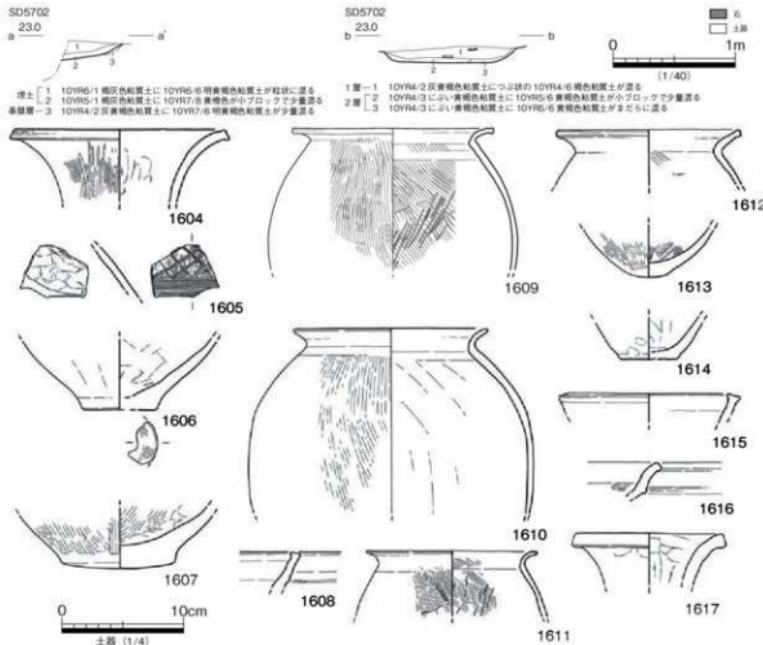
1600は最上層で出土した丸瓦片である。土師質焼成で凹面の布目を丁寧にナデ消す。1601は打製石包丁片である。1602は砂岩製、1603は流紋岩製の砥石である。1602は最上層出土。

以上、SD5701出土の土器は、下層から7～8世紀代の高杯が出土し、上層もその時期の遺物が多い。このことから7～8世紀代に何度も再掘削されながら機能した溝と推定できる。8世紀代において上層は埋没したが、最上層は9世紀以降にも再掘削が行われ溝機能が継続したものと考えられる。

上層出土の製塙土器も7～8世紀代に多い形態であり、土器の様相と矛盾ない。

SD5702 (192図)

調査区中央やや南寄りで検出した「L」字に屈曲する溝である。北西から南東方向に走行し、屈曲して北東に向う。幅1.1m、深さ0.13mで断面は逆台形で角が緩やかなカーブを呈す。多数遺構が重複する場所において、初期に検出しておらず多くの遺構に後出すると考えられる。出土遺物は弥生土器のみで、1604～1608は甕である。1604は後期前半、1605・1608は中期中葉に属し混在の様相を示す。1609～1612は甕である。後期後半以降に属す。1615は中期の鉢、1616は後期後半の高杯、1617は同支脚である。重複関係を考慮すると、古代以降の溝の可能性が高い。



192図 5区 SD5702 断面図・出土遺物実測図

SD5704 (193図)

調査区南西隅で検出した溝である。南東から北西方向に流下する。幅1m、深さ0.5mで断面は逆台形を呈す。調査区南壁断面では、古墳時代から中世にかけて形成した包含層を切り込んで開削している。埋土は灰黄褐色土でレキを含む。

1618～1620は古墳時代の須恵器である。1618・1619は杯、1620は高杯脚部である。6世紀後半から7世紀にかけてのものである。層位関係からみて、当該溝の時期を示すものではないと考える。

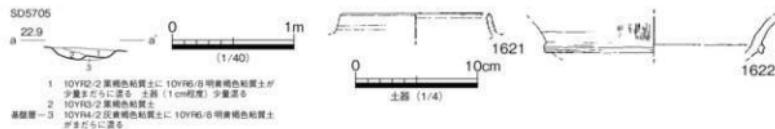


193図 5区 SD5704 出土遺物実測図

SD5705 (194図)

調査区南西付近で検出した溝である。南東から北西方向に流下する。幅0.8m、深さ0.35mで断面は逆台形を呈す。調査区南壁断面では、古墳時代から中世にかけて形成した包含層が当該溝の埋土を覆つておらず、包含層形成前に埋没した溝である。埋土は黒褐色土で基盤層ブロックが少量混じる。

1621は古墳時代後期の須恵器杯である。1622は弥生時代後期前半の装飾高杯片である。1621は6世紀後半に属し、当該溝の所属時期を示すものと考える。

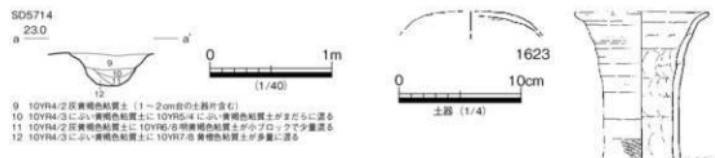


194図 5区 SD5705 断面図・出土遺物実測図

SD5714 (195図)

調査区中央やや南寄りで検出した溝である。南から北に流下する。幅0.6m、深さ0.28mで断面は「U」字状を呈す。埋土は灰褐色系土で下層は基盤層ブロックが混じる。周辺の遺構に後出する。

1623は古墳時代後期の須恵器杯である、1624は弥生時代後期後半の長頸壺である。1623は6世紀後半に属し、当該溝の所属時期を示すものと考える。

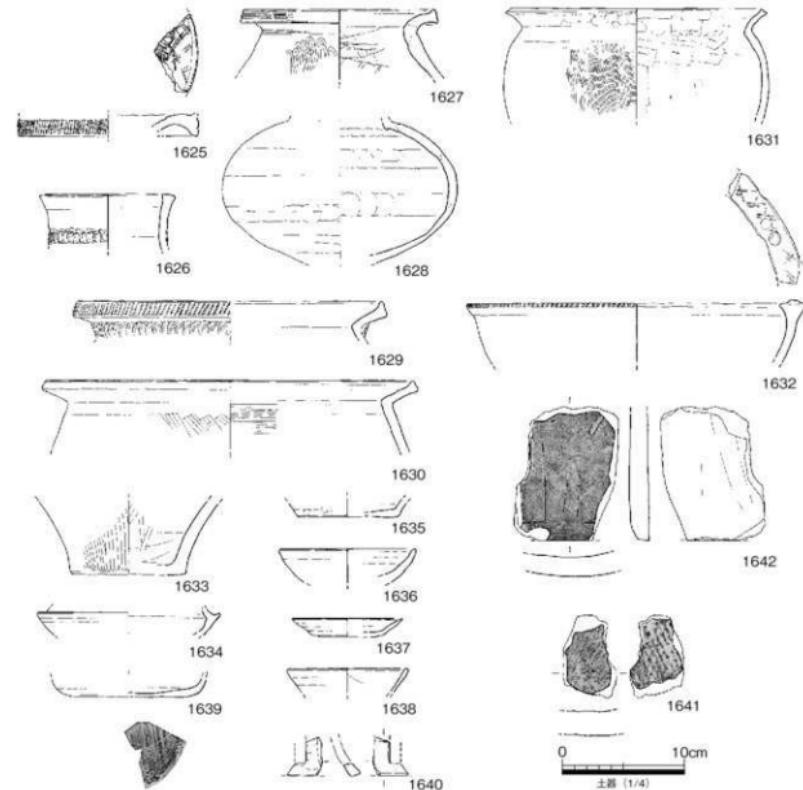


195図 5区 SD5714 断面図・出土遺物実測図

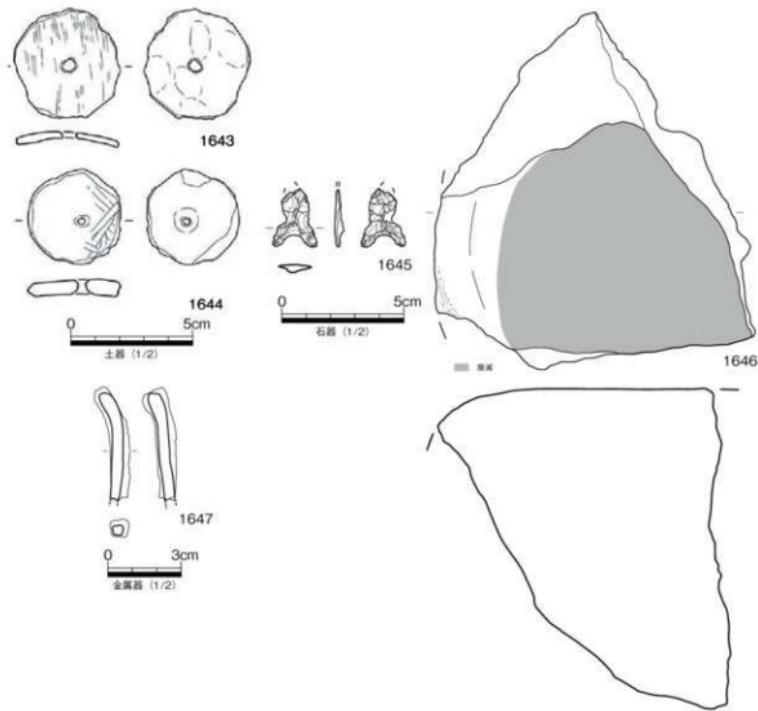
c. 柱穴出土の遺物 (196・197図)

建物復元ができなかった柱穴から出土した遺物をまとめて報告する。1625～1628は弥生土器壺である。1625は大きくラッパ状に開く口縁部の端部を主に下方に拡張し、端面に沈線及び縱位の密な刻目、内面に斜格子沈線文を施す。1626は口縁部が直立し上端部を主に内面に肥厚させナデ調整で仕上げる直口壺である。頸部下端に押捺突帯を貼付する。これら1625・1626の土器は四線文出現前の中期前半新相に位置づけられる。1627・1628は後期前半に所属する壺である。1628は細頸壺の胴部と考える。1629・1630は弥生時代中期の壺である。1629は口縁端部拡張および縱位刻目を施し、胴部境に押捺突帯を貼付する。中期前半新相に所属。1630は口縁部が「く」字に屈曲し端面を面取り、胴部内面上半に横方向のヘラミガキを施すものである。中期前半新相に所属する。1631は弥生時代後期の鉢で胴部内面全面をヘラケズリ調整する。1632は弥生時代中期の鉢である。口縁部を内外面に拡張し、端面に斜格子文及び円形浮文を貼付し、端面に細かな刻目を施す四線文出現前の土器である。

1634は古墳時代後期の須恵器杯、1635・1636は古代の須恵器杯、1637・1638は14世紀代の土師器小皿・杯である。1640は脚部に方形透孔をもつ高杯もしくは台付鉢脚で弥生時代に属す。1641・1642は平瓦



196図 5区柱穴出土遺物実測図 (1)



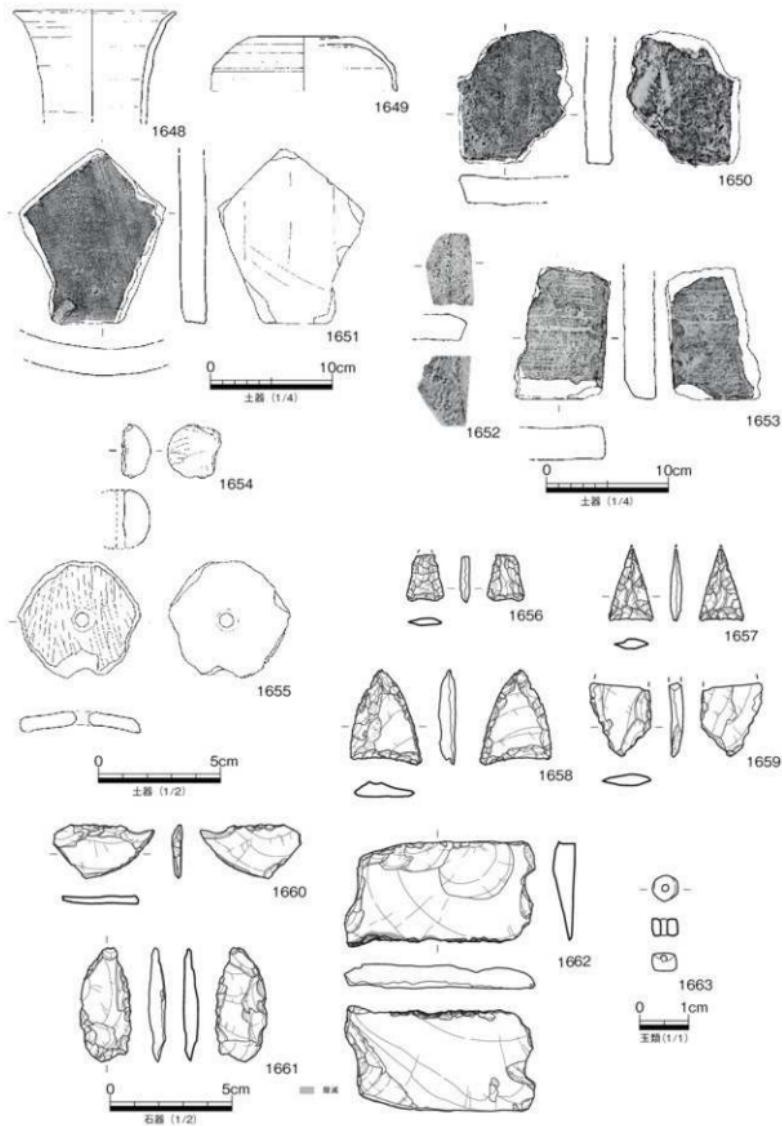
197図 5区柱穴出土遺物実測図（2）

片である。1643・1644は弥生時代の土器片利用の紡錘車である。

1645はサヌカイト製打製石鎌である。上半部形状が歪な未成品である。1646は砂岩製の砥石である。塊石の一面のみを砥面とする。1647は鉄器で針である。

d. 5区包含層出土の遺物（198図）

包含層より出土した遺物をまとめた。1648は弥生土器長頸壺口縁部片である。直立する頸部から口縁部が緩やかに外反し開く形態で、内外面に強い横ナデを施す。後期前半に属する土器である。1649は須恵器蓋である。天井部はヘラ切り後未調整。1650～1653は平瓦片である。1651・1652の凹面には布目が残る。1653の表裏には糸切痕が目立つ。1654は土玉である。直径2.4cmで表面に顕著なヘラミガキを施す。穿孔は直径2mmである。1655は土器片転用の紡錘車である。外面にヘラミガキが残る。1656～1658はサヌカイト製打製石鎌である。1659～1661はサヌカイトの二次加工ある剥片である。棱線上を敲打して剥離したもので、両極打撃による剥片と考えられる。1662はサヌカイト製打製石包丁である。両端に抉りを施し、背部と刃部を平行に整形する。刃部表裏には磨滅痕をとどめる。1663は蛇紋岩製白玉である。古墳時代後期に属する。



198図 5区包含層出土遺物実測図